信越郵政局飯田2号宿舎建設工事に伴う埋蔵文化財
発掘調査報告書

栗屋元遺跡

1986.10

郵政省信越郵政局
長野県下伊那郡上郷町教育委員会

信越郵政局飯田2号宿舎建設工事に伴う埋蔵文化財
発掘調査報告書

栗屋元遺跡

1986.10

郵政省信越郵政局
長野県下伊那郡上郷町教育委員会

飯田二号宿舎新築に伴う
埋蔵文化財の発掘調査について

飯田地区の郵政省職員宿舎は，老朽化した木造宿舎が多く，特に老朽化の著しい６戸を別の土地に集約立体化して建替えをするよう計画し，数年来，大蔵省などの関係省庁に対し働きかけてきたところであります。

昭和60年度になって建替えが承認されましたので，これを実行に移すべく宿舎用地を探しましたところ，上郷町黒田に田と畑ではありますが飯田郵便局にも近く環境的にも申し分のない土地が見つかりましたので，その地に職員宿舎を建てるべく昭和61年１月に事前のボーリング調査をしておりました。

その最中に，上郷町教育委員会の方からその土地が栗屋元遺跡という文化財の包蔵地であり，恒久的な建築物を設置する場合には事前に発掘調査を実施して記録保存する必要があるとのお話がありましたので，早速郵政省から予算措置してもらい，上郷町教育委員会さんに昭和61年４月埋蔵文化財を発掘していただいた次第です。

発掘調査の実施に当たりましては，上郷町教育委員会のご協力を得，また，関係者の御尽力により無事終了をし，昭和61年11月には新職員宿舎の完成を見ることが出来るようになりましたことを心から感謝いたす次第であります。

昭和61年10月

信越郵政局長　丸　山　一　敏

序　　文

昭和60年度町単道路改良事業において黒田地籍の辻線改良工事を延長189.75メートル，幅員4.5メートルと決定し，工事計画の実施に伴い当路線の通過地点にある栗地元遺跡・北垣外遺跡の埋蔵文化財発掘調査を行いました。

計画路線は現道約1.5メートルを拡幅改良するものであり調査面積の規模から期待され，興味深いものがありましたので，町教育委員会を通じて調査団長に今村善興先生をお願いし，大変なお骨折りを頂いて2期分までの調査を完了し，立派な記録保存を完成させることができました。

この栗屋元遺跡他の発掘調査は昭和60年9月25日から10月19日までの間，第2次は昭和61年3月3日から3月16日までの間，今村団長指揮のもとに地元作業員の方々を始め，多くの皆さんの御協力により発掘が進められ，好資料と成果を得て考古学の一頁をかざることができました。ここに報告書がまとめられるに当り，本調査に御尽力下さった今村善興先生を始め，調査に御協力を頂いた関係の皆さん，教育委員会の皆さん等多くの皆さんに感謝を申し上げます。

昭和61年10月

下伊那郡上郷町長　山　田　隆　士

例　　言

1，本書は昭和61年度上郷町黒田郵政省厚生施設建設工事に伴う「栗屋元遺跡」の発掘調査報告書である。

2，栗屋元遺跡Ⅲ地籍の結果を主体にし，参考資料として，Ⅰ地籍・障子垣外の遺構・遺物を載録した。

3，本書の資料作成に当り，現場での計測・記録図作成は林敏・林貢・小林・今村の協力を得て今村が当り，石器計測は林敏，土器計測は林貢，その他の製図は今村が当っている。

4，本書の編集・報文執筆は今村が担当した。

5，出土遺物等は一括して上郷町歴史民俗資料館に保管してある。

上郷町栗屋元遺跡報告書

目　　次

序　　文

例　　言

Ⅰ　黒田栗屋元地籍周辺の環境 …… 1

1，位置と地形 …… 1

2，栗屋元遺跡周辺の遺跡 …… 1

Ⅱ　調査の経過 …… 2

1，調査経過 …… 2

2，調査団組織 …… 3

Ⅲ　発掘調査の結果 …… 4

1，遺跡の概要 …… 4

2，遺構と遺物 …… 6

(1)　奈良時代住居跡 …… 6

(2)　奈良時代か古墳時代竪穴状遺構1・2　6

(3)　溝状遺構1・2 …… 7

(4)　溝状遺構3・4 …… 7

(5)　柱穴群 …… 8

(6)　土壙群 …… 8

(7)　東側上層の遺構（溝5･6，柱穴群1）　8

(8)　東側下層の土壙群・竪穴 …… 9

(9)　其他の遺物 …… 9

(10)　栗屋元遺跡Ⅰ地籍の遺構と遺物 …… 10

①　1・2号住居跡 …… 10

②　中世穴蔵状竪穴 …… 10

③　近世建物跡と溝状遺構 …… 10

④　弥生時代土壙と近世竪穴状遺構 …… 11

(11)　北垣外地籍の遺物 …… 11

(12)　栗屋元遺跡障子垣外地籍の遺物 …… 11

Ⅳ　発掘調査のまとめ …… 12

1，栗屋元遺跡とⅢ地籍の立地 …… 12

2，奈良時代住居跡の発見 …… 12

3，多岐に亘る溝状遺構の発見 …… 13

4，土壙群の持つ意味 …… 13

後　　記 …… 14

＜図　版＞

第1図　栗屋元遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 15

第2図　栗屋元遺跡Ⅲ地籍の遺構全体図 …… 16

第3図　1号住居跡　上層と下層 …… 17

第4図　1号住居跡　出土土器 …… 18

第5図　1・2号竪穴・土壙2・3，30～38 …… 19

第6図　溝状遺構2，土壙17～22 …… 20

第7図　溝3，柱穴群Ⅱと土壙4～9 …… 21

第8図　東側隅溝1・5・6，柱穴群Ⅰ，土壙群40～70 …… 22

第9図　溝1とその周辺，柱穴群Ⅱ・土壙の土器拓影 …… 23

第10図　溝状遺構2・3・4・5出土土器拓影　24

第11図　下部赤褐色土，溝・土壙出土土器拓影　25

第12図　遺構，各グリット出土土器拓影 …… 26

第13図　土壙・各グリット出土の石器1 …… 27

第14図　土壙・各グリット出土の石器2 …… 28

第15図　溝3・5，グリット出土の小形石器と井戸尻Ⅱ式土器 …… 29

第16図　栗屋元Ⅰ地籍1号住居跡・2号住居跡　30

第17図　栗屋元Ⅰ地籍溝状遺構1と建物跡 …… 31

第18図　栗屋元Ⅰ地籍遺構配置，2号竪穴 …… 32

第19図　栗屋元Ⅰ地籍1号竪穴と土壙1・2 …… 33

第20図　栗屋元Ⅰ地籍1・2号住居跡・土壙　栗屋元Ⅱ地籍出土石器 …… 34

第21図　栗屋元Ⅰ地籍出土石器 …… 35

第22図　障子垣外地籍出土土器拓影1 …… 36

第23図　障子垣外地籍出土土器拓影2 …… 37

第24図　障子垣外地籍出土土器拓影3 …… 38

第25図　障子垣外地籍出土土器拓影4 …… 39

第26図　障子垣外地籍出土石器 …… 40

＜写　　真＞

写図１　発掘調査前の栗屋元遺跡Ⅲ地籍 …… 41
写図２　１号住居跡 …… 42
写図３　１・２号竪穴 …… 43
写図４　１号住居跡と周辺のピット・土壙・溝　44
写図５　溝状遺構２・３ …… 45
写図６　西側の土壙と柱穴群Ⅱ …… 46
写図７　東側上・下層の遺構 …… 47
写図８　土器の出土状況と古銭 …… 48
写図９　発掘調査風景 …… 49
写図10　栗屋元Ⅰ地籍の旧道と建物跡 …… 50
写図11　近世建物跡 …… 51
写図12　２号住居跡と土壙１・２ …… 52
写図13　２号穴蔵土壙 …… 53
写図14　北垣外・栗屋元Ⅰ地籍の溝と石垣 … 54
写図15　栗屋元遺跡調査団 …… 55

Ⅰ　黒田栗屋元遺跡周辺の環境

1，位置と地形

長野県下伊那郡上郷町は，飯田盆地のほぼ中央に位置する。東は天龍川を挟んで喬木村に接し，北は土曽川によって飯田市座光寺に，野底川上流では高森町・飯田市松川入に境している。鷹巣山・風越山から野底川下流・松川によって旧飯田市・旧鼎町・旧松尾地籍とに接する26㎢に及ぶ広大な地域を占める町である。

この地域は南流する天龍川とその支流によって形成されたいくつもの河岸段丘と広大な扇状地の広がる所で，現在は飯田市に接する衛星的住宅地域として大きく発展しており，年々人口増加が著しい。この恵まれた自然環境により，原始・古代から優れた生活舞台であって後述のように埋蔵文化財包蔵地の多い地域の一つである。

伊那盆地全域に形成されている河岸段丘は，火山灰土の堆積を基準にして高位面・高位段丘・中位段丘・低位段丘Ⅰ・Ⅱに大きく編年されている。上郷町にある段丘面は，火山灰土を含む洪積土壌の堆積する中位段丘・低位段丘Ⅰと，火山灰土がのらない沖積土壌のみられる低位段丘Ⅱに当るものである。前二者は普通上段と呼ばれる黒田地籍の各段丘面であり，後者は下段と呼ばれる飯沼・南条・別府地籍に当る段丘面である。飯田市松尾地籍と共に低位段丘Ⅱが特に発達している地域として知られ，立坂段丘崖下に位置する立坂面に続いて飯沼面・南条面・別府面が夫々南北に横広く高低差を持ちながら東西に続き，下伊那地方の段丘模式地の一つになっている。

下黒田地籍は飯田高校のある低位段丘Ⅱから中位段丘にかけた一帯で，県道飯田・飯島線辺りまでの範囲にある。高位段丘に属する見晴山の段丘面を間において幾つかの台地が並んでいる。見晴山台地下の南斜面は，野底川によって形成された扇状地が，又野底川によって浸食されてできた段丘で低位段丘Ⅰ・Ⅱに当るものが，下黒田から別府にかけて続いている。この扇状地は古い扇状地から新しい扇状地まで何回にも重なって作られたものである。野底川と見晴山の段丘との間の下位段丘面は西上方は狭く，東ほど広くなるので栗屋元遺跡周辺は，野底川を挟んで主要遺跡が並んでいる所である。

栗屋元遺跡は，見晴山段丘の南東崖下を走る国鉄飯田線の軌道北から，上郷駅から小伝馬橋に通ずる道路の東にかけて細長く続く遺跡で，南の野底川添いの北垣外遺跡とも続いている。

2，栗屋元遺跡周辺の遺跡

上郷町の遺跡は昭和57年度の詳細分布調査によると埋蔵文化財包蔵地67・古墳32基・中世城跡3の合計104遺跡である。未登録の遺跡もいくらか残り，古社寺跡等も含めれば更にこの数を上

回る。下伊那郡内では地形的に恵まれた所であるので，遺跡の濃密な所の一つである。

第１図の遺跡を上方からあげると，垣外・ミカド・増田・福島・原の城Ａ・原の城Ｂ・原の城跡・今村・見城垣外・栗屋元・北垣外・三反田・川底・ドドメキ・目光原・高松原で，飯田市内の遺跡は，大門町・大雄寺付近・旧風越高校・浜井場・伝馬町遺跡等である。

場所によって違いはあるが，福島遺跡を除いては縄文時代の遺物はどの遺跡からも出土し，弥生時代・平安時代・中世の包蔵地として知られている。28の垣外遺跡では昭和61年12月，町道改良工事中弥生時代後期中島式土器を伴う住居跡が３軒確認され，ミカド遺跡でも道路改良工事中弥生時代後期の土器が発見された。102は原の城跡で中世の城郭で，その中に埋文包蔵地が重複している。城跡はいうまでもなく予想以上に広範囲で，崖下の栗屋元辺りまで関連することも有り得る。今村（21）・見城垣外（22）・北垣外（24）は以前から縄文時代の有力な遺跡として知られ，今回資料紹介した縄文時代中期初・中葉の土器の出土地として飯田市の大門町（Ａ）遺跡と共に有名である。35の高松原遺跡は何回かの発掘調査によって，縄文時代前・中期の住居跡，弥生時代後期の大集落が確認され下伊那の代表的な遺跡となっている。38のドドメキにはドドメキ古墳列がある所で縄文時代・弥生時代の遺物発見も多い所である。

今回の発掘調査地域では中世の遺物は発見されたが，確たる中世の遺構は発見されていない。しかし，南側の北垣外地籍には堀かと思われる所もあり，その東一帯は中世陶器が多く，竪穴状遺構の発見もあるので，中世期の包蔵地としても注意しなくてはならない。

Ⅱ　調査の経過

１，調査経過

昭和61年３月上郷町町道辻線改良工事に伴う発掘調査を実施中，隣接地に郵政省の厚生施設が建設されることになり，上郷町教育委員会と信越郵政局との保護協議が始まった。建設工事が急がれることもあって３月８日の協議に基いて上郷町教育委員会から委託を受け，３月13日から用地北側から試掘のためのトレンチ掘りの作業にかかった。

試掘調査の結果，縄文時代・古墳時代の土器・石器の出土が多く，住居跡・溝状遺構・土壙等の存在もみられるので，本格的な発掘調査の実施が認められ，南東側をＡ地区としてグリットを設定しグリット掘りの作業にかかる。道路寄りの10列Ｗ辺りで深い溝（溝状遺構１）が発見され，縄文時代晩期の甕が発見された。

３月20日からは北垣外遺跡の調査が終了したので，作業員全員（７名）により中央部のグリット掘りにかかり，住居跡・溝・土壙等が多いことがわかったので３月24日に重機により広い部分の東側を排土した。その結果方形の住居跡１・竪穴１・溝３・土壙多数が発見された。３月25日から１号住居跡の検出作業を進め，奈良時代の住居跡であることが確認された。３月31日から県

警察高速アパートの皆さんの協力を得て，溝・竪穴・土壙の検出作業を進めた。

1号住居跡の辺りはローム層が単純であるが，東へ来るに従って下層面があるようにみられ，縄文時代中期の土器片の包含層が厚く下層の遺構存在の検出を試みたが東側は溝の重なりが多く，焼け土等の発見はあったがはっきりしなかった。土壙の数も20位あり，弥生時代のもの・縄文時代晩期のもの・縄文時代中期のもの・時期不詳のもの等が重複していた。

4月3日から西側の土盛を重機によって東側へ移動し，東側隅道路寄りの排土をする。排土の作業は4月7日までかかる。西側では竪穴・土壙・焼け土・ピット群がありそうなので人力による排土作業を進める。

4月9日から西側竪穴2，土壙群，ピット群の検出を進め，2号竪穴は落込み・柱穴・少量の焼け土が検出され，遺物は縄文時代の土器のほか，土師器片少量が検出された。土壙は整ったものは少なく，上・下層面に重複がみられ，中には弥生時代のものも発見された。北側道路沿いには土器片集中地があり，不規則ではあるが10数個のピットが検出された。柱穴群2である。

東側隅の一帯はローム層の堆積が厚く，上部黒色土中に溝・ピット群がみられるので4月12日から上層より順次検出にはいる。溝1寄りから縄文時代晩期の土器片が発見され，溝5・6があり，その東側に20数個のピット（柱穴群1）が検出された。土層的には黒色土中のもの，赤褐色土中のものがあって重複している。道路沿いにロームマウンドがあったり，土壙・竪穴の存在がみられるので，4月17日から下層の検出にはいる。土壙群があることが分ったが入り組みが多く検出に手間取った。4月22日，土壙群の検出を終り，実質25日間に亘る現地での発掘調査を終了している。

その後，他地区の発掘作業が終了した8月から遺物整理・図面整理・図版作成を進め，10月中旬原稿作成を終了させて報告書を仕上げている。

なお，昭和60年9月25日から10月19日にかけて発掘調査した町道辻線の遺構等について，61年3月までに図面作成が終り，原稿執筆を直前にして今回の発掘調査に出動したので報告が遅れていた。同じ栗屋元遺跡内であるので，関連資料として巻末に付加えている。また，障子垣外遺跡の土器・石器は，長谷川真澄氏によって耕作中発見されたものが保管されていた。教育委員会吉川係長によって見出され，上郷町歴史民俗資料館へ寄贈されたものである。資料的には栗屋元Ⅲ地籍の土器の規範になるものであり，場所的に近い所のものであるので参考資料として載録した。

2，調査団組織

(1) 栗屋元遺跡調査委員会

北　原　忠　夫　　上郷町教育委員会委員長
吉　川　昭　文　　上郷町教育委員会教育長
小　室　伊　作　　上郷町教育委員会委員

矢　崎　和　子　　上郷町教育委員会委員
北　原　　勝　　上郷町教育委員会委員
小木曽　英　寿　　上郷町文化財保護委員会委員長
牧　野　光　彌　　上郷町文化財保護委員会副委員長
麦　島　正　吉　　上郷町文化財保護委員会委員
菊　本　正　義　　上郷町文化財保護委員会委員
稲　垣　　隆　　上郷町文化財保護委員会委員

(2)　調査団組織

①　調査団

団　　長	今村善興（長野県文化財保護指導委員・日本考古学協会員）			
調査補助員	林　　敏			
協力作業員	鎌倉計美	田中　勇	佐々木　茂	北原孝子
	今村春一	林　貢	小林　薫	今村倶栄
	佐藤徳子	鈴木文子	林　道江	林　典子
	永原三代子	松本要子	丸山美津枝	久保田紀子
	高野朱美	森田きよ子	木内京子	土橋あい子
	沖村貴代子	熊井利恵子	茂木幸枝	河野徳子
	斎藤当子	内山孝子	茅野綾子	徳武みつ子
	今村貴美江	宮下良子	清水寿美子	黒田かなえ
	原田千秋	北原いく	林　静枝	片桐信一
	中村明美			

②　調査事務局

吉川昭文（教育長）　　篠田公平（教育委員会事務局長）
北原義信（建設課長）　　宮下成弌（建設課工務係長）
吉川勝一（社会教育係長・社会教育主事）　林　恵津子（社会教育係，主事）

Ⅲ　発掘調査の結果

1，遺跡の概要

栗屋元遺跡は野底川の左岸に面する低位段丘の中間に位置し，標高530～540ｍで続く見晴山の段丘の西南崖下にあって，標高510～490ｍの緩やかな傾斜面に細長く続く遺跡である。南には標高500ｍ前後の北垣外遺跡が標高差４～５ｍで接している。昭和58年度の上郷町内埋蔵文化

財包蔵地詳細分布調査の報告書によれば，縄文・弥生・平安時代，中世の包蔵地となっている。昭和47年の飯田高校考古学研究会の「上郷町の遺跡分布調査と研究の報告書」によると「障子垣外遺跡」として，次の報文が載っている。「上郷町黒田字障子垣外にある。野底川左岸の下段段丘に位置し，現在果樹園・水田となる。遺跡は国鉄飯田線に切られている。以前，長谷川勝氏宅裏から縄文中期・後期の土器が果樹園の施肥中に出土した。我々の表採でも，縄文中期加曽利E式土器片を多量に採集し，須恵器，打石斧3・石錘1を得た」とある。遺跡範囲を飯田線の軌道の上・下，現在の見城垣外遺跡の一部が含まれていた。下方辻線北側を「川底」遺跡と捕えている。

その後の詳細分布調査の結果，遺跡の範囲は夫々拡大され，1図のように上方から，22の見城垣外・23の栗屋元・24の北垣外・37の川底遺跡に登録されている。微地形では違いがあるが，22・23・24は一つの遺跡としても不自然さはなく，全地域が大きな遺跡地帯とも考えられる。今回の郵政省用地内の発掘調査によると，縄文時代の土器は多量出土しながら，土壙・溝・柱穴群のほかは住居跡の発見がなく，奈良期の住居跡・竪穴の発見に限られている。辻線の用地内では，縄文時代の住居跡が1軒，主体は中世期の建物跡・竪穴である。発掘調査ではないが，障子垣外長谷川氏宅付近の大量の縄文時代中期初・中・後葉の土器出土等から考えられることは，縄文時代の古い時代から，中世・近世に至る複合濃密遺跡で，時代毎に僅かずつ所を変えた集落・生活遺構があるものと思われる。

＜主な遺構＞

奈良時代住居跡1，古墳・奈良時代竪穴2，古墳時代溝状遺構1，時期不詳の溝5，縄文時代後期柱穴群1，中世～古墳時代柱穴群1，弥生時代土壙3，縄文時代晩期土壙3，縄文時代中期・時期不詳土壙60以上。

＜主な遺物＞

縄文時代草創期有舌ポイント1，縄文時代前期石匙4，縄文時代中期土器片やく600，後期土器片40，晩期深鉢1，同土器片20，弥生時代土器片10，古墳時代土器片10，奈良時代甕2，同土器片70，縄文時代石鏃6，同石器60，平安時代土器片10，中世陶器片30。

＜遺構の配置＞

調査地区全域に亘って遺構が検出されている。東側は下部ローム層中に遺構が重複していた。西側の広い用地内中央やや北寄りに奈良時代の方形の住居跡が一軒検出され，その南西に竪穴1，北西に近く竪穴2が検出されている。確たる土器の発見はなかったが，僅かに土師器片が共に発見されたので，奈良期或いは古墳時代の竪穴状遺構と想定される。1号住居跡の周辺から西南・東南の溝2沿いにかけてピットが多く検出された。覆土が黒色土のもの，茶褐色のものがあるので同一時期ではないが，黒色土の入ったものは住居跡と同じ頃かとも思える。溝2沿いのものも同様の黒色土であって或いはと時期が想定されるが，伴出遺物は縄文時代のものだけではっきりしない。

溝状遺構は6本検出されている。溝1の底から流れてはいるが，古墳時代と思われる土師器片

が出土しているので，古墳時代以降と思う。その西に溝２がある。出土遺物は縄文時代のものに限られているが，溝縁にあるピットから時期が想定されそうである。溝３は南西から北西に地形傾斜に沿って流れるもので，水の流れが顕著で，遺物の流入も多い。溝４はやや浅く上層のものである。東側道路沿いに溝５・６がある。赤褐色土上方を流れるものである。溝５の上面で有舌ポイントが出土している。

土壙は溝２の西側一帯，用地西北側，東道路沿いに夫々群をなす。２図のように上層・下層のものは線で区別してあるが，確たる遺物出土のものは少ない。弥生時代のもの，縄文時代晩期のものが散在するが，他は大部分縄文時代中期のものであろう。弥生時代のものは５・24，縄文時代晩期のものは13・20・22・23と想定している。

ピット群・柱穴群は，１号住居跡周辺・溝２の西一帯のほか，北隅に縄文時代後期のもの，東側道路沿いに古墳時代以降のものがある。この他に溝２の北側，東の道路沿いにロームマウンドがある。

２，遺構と遺物

(1) 奈良時代住居跡（１号住居跡）

① 遺構（２・３図）

西側中央やや北に発見された住居跡で，南北4.6ｍ・東西4.6ｍの隅丸ほぼ方形のプランで，西壁中央に粘土製の竈を持つ。主柱は４本で，Ｐ１は20，Ｐ２は34，Ｐ３は36，Ｐ４は二重で44㎝の深さがある。壁高は20～25㎝を測り直に近く掘り下げてある。東隅に浅い穴があって菰手状の石が８個置かれている。烏帽子形の甕が東北壁に立掛けられ，竈と竈の南側に土器が多く置かれていた。床は固く，焼けた所が多いが，二層の所もあり，掘下げると幾つかの穴があった。遺物の出土状況からＰ19・22を除いては縄文時代の土壙かとも思われる。竈の潰れが甚だしく形態は不詳であった。

周囲に支柱穴状のピットがあったが，この住居のものか別のピット群のものか分らない。

② 遺物（４図）

土師器の甕・椀・坏が主で，須恵器片１，鉄片１が出土している。１は北壁に立掛けられていた甕で，器高45㎝，口径16㎝の厚めの烏帽子形の土器で，器面は粗い擦痕がある。２・３，10～17は甕の破片，４・５は椀，坏で，18は竈の壁外にあった須恵器で，古墳時代のものに近い。

(2) 奈良時代か古墳時代竪穴状遺構１・２

○ 遺構と遺物

１号竪穴は１号住居跡の南西にある。南北 2.3ｍ，東西 1.9ｍ，深さ40㎝程の不規則な竪

穴である。掘り方も凸凹していて壁も傾斜をもつ。壁縁に9個のピットをもつ。用途は不詳であるが墓壙かもしれない。覆土は黒褐色土で1号住居跡と類似し，1片だけであるが下部から土師器片が出ているので古墳・奈良時代のものと思う。

2号竪穴は，1号住居跡の北西，2mほどの近くにある。楕円形の竪穴で，南北4.1m，東西3.1mを測る。壁高は北で20cm，南は高低差なく開口している。周囲と中に5個のピットをもち，北壁沿いに炭と焼け土がある。出土遺物は縄文時代の土器・石器が数点の外土師器が1片床面で出土している。焼け土はあるが量が少なく住居とまではいかないが，1号住居に連なる遺構かもしれない。

(3) 溝状遺構1・2

○ 遺構と遺物（6・8・9・10図）

1号住居跡の南東を南北方向に走るのが溝1，その東側をやや西に振れてあるのが溝2である。溝1は用地の関係で6mほどしか検出してないが，北道路側で幅1.2m南で2m深さ60～90cmを測る。何時期に亙るように土層は複雑であるが，4の赤褐色粘質土中から土師器の口縁(10図1）が出土し，2の黒色砂質土から縄文時代晩期の鉢（10図4）が出土している。

溝2は幅1.5～1.7m，深さ30～40cmのもので，底は黄砂質土が蛇行し，覆土は黒色砂質土である。溝の内では最も新しいとみられる。両溝縁に径20～30cmほどのピットが20位並ぶ。多くは黒色土が入り溝に伴うものであろう。出土遺物は10図22～35で縄文時代中期・後期の土器片，土偶・石器であるが，住居跡とその周辺のピット群に関わるものかと思う。溝1・2は同時期のものではないが，古墳時代から奈良時代の頃のものであろう。

(4) 溝状遺構3・4

○ 遺構と遺物（7・10・　図）

溝3は用地南西側を地形傾斜にそって続く本遺跡最大の溝である。幅1.6m～2m，深さは60～80cm，上層から6層ほどの堆積がみられ，砂質土の流入も多く底も掘りえぐられた所が目立つV字状の溝である。水の影響の最も顕著な溝である。遺物の包含は極めて多く200点以上に及ぶ。摩滅したものが多いが，10図1～21・31・32・36と13図の石器・石匙4・石鏃等で，縄文時代前期・中期・後期の土器片等多様である。この遺物で即時期は決められないが，堆積土の状況・遺物の包含状況から古い時期のものであろう。上方に各期の縄文時代の包蔵地の存在を暗示している。溝4は南側隅にあったもので浅く，灰白色の砂質土が入っていた。時期不詳であるが，古墳時代以降のものであろう。

溝5・6，柱穴群1は，東側道路沿い地区上層で報告する。

(5) 柱穴群 2

○ 遺構と遺物（7・9図）

北側上方道路沿いに不規則ではあるが20個ほどのピットが並ぶ。土器片の集中もみられたので柱穴群2と扱った。穴は20～25㎝ほどの大きさで，深いものは30㎝ほど穿たれている。1図でみられる様に，1号住居跡周辺にもピットがみられるが，覆土等がやや異っている。遺物は，道路沿いのピット中から発見された以外は，ピットの周辺から出土している。9図6～21，32～37のもので，縄文時代晩期の条痕的なものもみられるが，後期の堀の内的なものもある。勿論周辺の関係から中期のものもあるが，縄文時代後期に比定した。柱穴群1については，東側上層の遺構で報告する。

(6) 土壙群

土壙は全域，上・下層に亙って70基ほど検出した。大きさ・掘り方・形態・包蔵遺物等様々であり，検出方法がやや雑であって時期的根拠の摑めないものも多い。地域的に，①北上方，②1号住居跡南東周辺，③東側道路沿いに分けて報告する。

① 北側上方の土壙群（5・7・9図）

北側上方では，2号竪穴の西側で，1～3，30～39の土壙が検出されている。38から9図42・43・45の土器が出土している。北側上方では4～9が検出され，5から弥生時代後期の土器片が出土している。他ははっきりしないが，8から9図38・39，その周辺から11図9のほか縄文時代中期の土器片が出土している。

② 1号住居跡南東周辺の土壙（6・7・9図）

1号住居跡の東に，24～29の土壙が並ぶ，掘り方も浅くピット状のものもあるが，25からは9図の41が出土している。

1号住居跡の南東に13～23の土壙群がある。13は炭・焼け土も含まれ，縄文時代晩期の土器片が出土している。20・21・22は掘り方も深めで，上面から下層にかけて土器片・石器の出土も多い。9図22は土壙13，23～27は土壙21，28～30・35～37は土壙22の出土土器である。縄文時代中期の土器片もあるが，晩期の条痕文土器片も多く，土壙13・20・21・22は縄文時代晩期のものかと思われる。縄文時代晩期の遺物は，溝1内で発見された鉢形土器のほかに，溝1の東南付近から9図3の浮線網状文土器・条痕文土器片も出土している。

③ 東側道路沿い下層の土壙群は土壙16～70が検出されているが，下層のものと思われる。次項の下層面で報告する。

(7) 東側上層の遺構（溝5・6，柱穴群1）

① 柱穴群1（8図）

東側道路沿い，3層面の黒混じり赤褐色土層から掘り込まれたピット群である。東隅で20

個ほど，溝１縁まで含めると30以上になる。溝１・５ほか土層面も同層にある。遺物の発見はなかったが，１号住居跡付近のピットと類似していて，古墳時代後期以降のものであろう。

② 溝５・６（８図）

東側道路面中央から南に蛇行する溝５と，途中で西へ分流する溝６がある。８図の土層図でみられるように，黒混じり赤褐色土中にある溝である。幅1.3ｍほど，深さ20～30㎝程度の浅いものであって，黄砂質土が入っていた。溝縁・周囲にピットがあったが，規則制はなく別のものかもしれない。遺物は縄文時代の土器片が流入しているほかは時期規定の遺物は発見されていない。溝５上面で有舌ポイントが発見されている。表面が摩滅している。

(8) 東側下層の土壙群・竪穴

○ 遺構と遺物（８・９・10・11図）

溝５・６の下層は赤褐色粘質土・黒褐色土等が堆積し検出に苦労している。土壙58・59の付近から11図１～８の縄文時代中期中葉の土器大形片が出土し，坑内では33から35の爪形類似の土器片，36～59は此処の土壙群から出土している。中には縄文時代中期後葉の土器片をもつものもあるが，多くは中期中葉の土器片出土である。南東アパート寄りに落込みがみられたが詳細不明。土器片の出土もあるので，或は住居跡かとも思われるが，竪穴と扱っている。

(9) 其他の遺物（11・12・13・14・　図）

① 縄文時代中期中葉・後葉の土器

11図の土器は，溝３・土壙・下部赤褐色土層中で発見された縄文時代中期中葉の土器である。１～８は東側土壙群，９は北側上方，11はミミズク把手の破片，12～24は各グリット出土の爪形文様の土器片，25～29は溝２・土壙・東側下部赤褐色土層中の爪形・爪形類似の土器片である。東側道路沿いの土壙群の多くは中期中葉のものと思われるが，その外にも中期中葉の遺構があったと思われる。或いは又，用地外上方・下方にこの時期の中心があるのかもしれない。

12図の土器は各グリット出土の中期中葉から後葉にかけての土器である。１～10は後葉加曽利Ｅ式の土器，11～17は半載竹管文様の仲間で，中期初・中葉のものもありそう，18以降は後葉から末葉にかけてのもの等多様である。何れにしても，縄文時代中期初頭から後葉・後期にかけての各種の土器が出土している。

② 縄文時代石器（13・14・15図）

13・14図の石器は土壙・溝・グリット出土の縄文時代の打石斧・磨製石器・石錘である。15図の小形石器は，１は有舌ポイント，２～４は石匙で，２は北側グリット，３・４は溝３である。６は黒曜石製スクレーパー，９～12は石鏃である。

(10) 栗屋元遺跡Ⅰ地籍の遺構と遺物

栗屋元遺跡Ⅰ地籍というのは，町道辻線東口，上郷駅から小伝馬橋に通ずる道路からの交差点の奥から，県警察高速アパート南の道路までで，図18の下のように，縄文時代住居跡・時期不詳の住居跡・中世竪穴・近世建物跡・竪穴・弥生時代土壙等が発見されている。

①１・２号住居跡（16・20図）

１号住居跡は旧道交差点辺りにあったが，耕作の撹乱が進みその一部を検出した。南・東の部分で推定すると，４～５ｍほどの竪穴であったと思う。柱穴も不規則，床も軟弱であり焼け土も僅かである。耕作土と，覆土から出土した遺物は，20図１～５の土器・図21の１～４の黒曜石剥片・磨石である。遺物は縄文時代中期中葉のものであるが，住居の年代は不詳である。

２号住居跡は東側，道路の東北奥にある。南北5.6ｍ・東西4.5ｍの楕円状の竪穴である。壁高は30～35㎝で傾斜を持つ。住居内に12のピットと大きめの穴をもつ。周りのピットは18～30㎝の深さがあって柱穴に適しているが，焼け土が発見されていない。遺物は，20図６～21の土器・21図の４～８の石器が出土している。土器は縄文時代中期中葉から後葉にかけたものである。焼け土がみられないので，住居跡とは言い難いが，一応住居跡として扱っておく。余り例のないことではあるが，構築したが使われなかったのかもしれない。

②　中世穴蔵状竪穴（18図）

１号住居跡の交差点から旧道を北東に行った所で検出された竪穴である。長径3.7ｍ，短径3.4ｍのやや変形した方形で，深さ95㎝ある。上面から40㎝辺りから人頭大以上の石が詰っていた。石を取除くと底には石が不規則に置かれていた。南西側中間の石の下から熙寧通宝が１枚（拓本参照）出土しただけで，他には何の遺物も発見されない。中世にはこの様な穴蔵が見付かることがある。関連する中世の遺構は発見されないが，建物跡に繋るものか，別時期のものかは不詳であるが注目すべき発見と思う。

③　近世建物跡と溝状遺構（17・18図）

旧道交差点南側に，旧道沿い南北やや西に振れて２条の溝状窪地が並ぶ。西側の細い・浅い窪地を挟んで５と１対のピットが並び，その東北側にやや幅の広い溝状の窪地には小さいピットが数多くあった。小さなピットは前側にもある。窪地の幅は，北側1.2ｍ・南側30～40㎝，長さ10.5と7.7ｍである。前側は叩のような窪みで，Ｐ１～Ｐ２，Ｐ６～Ｐ10は対をなし，その間は1.2・１・1.7・1.3ｍで，Ｐ３・Ｐ４の間が広い。その前面に段差があって，ピットが並ぶ。簡単な掘立柱の構造が想定され，建物の一画を示すものと思われる。遺物は近世陶器片２・鉄片だけである。この一帯に屋敷があったという伝承もないが，構造的には，北東に建物があったように思われる。その南に３条の細い溝が並んでいた。関連するものかどうか不詳である。なお，此処の旧道は，江戸時代座光寺方面から飯田城下へ通ずる幹線の１つで，古い大石垣がみられたが，今回の道路工事で煙滅した。

この辺りは「川底」と呼ばれ，西へ向う道路の西南側は7～8mの比高をもって低くなるので，小さい段丘端に位置し屋敷を構えるには適地である。道路下の河川改修工事中に中・近世の陶器片が出土している。

④ 弥生時代土壙と近世竪穴状遺構（19・21図）

辻線の上方田間氏宅の裏，北東へ通ずる道路交差点付近で発見され，西側に弥生時代の土壙・時期不詳の土壙・東側で近世の深い竪穴が検出されている。

1号土壙は1.3m・0.7m，深さ20cmの小振りのもので，上面に石が積まれている。遺物は出土していない。その東側に大きな土壙がある。用地の関係で半分検出しただけであるが，長径3，短径2mくらいと推定され，深さは55cmある。坑底から21図の有肩扇状形石器(11・12）・磨石器・打石斧が出土している。土器の出土はないが，使用痕の少ない有肩扇状形石器が出土していることから，弥生時代の墓壙かと思われる。

東側の竪穴は，3,6×3.3mほどの変形方形の竪穴で，何回かに亙って構築された形跡がある。19図にみられるように固い床が平坦ではないが4枚以上みられる。遺物は近世陶器・鉄片が出土しているが，炭塊のほかは焼け土は見付かっていない。ピットも検出されてはいるが規則的ではない。近世期に構築された穴蔵的な竪穴であろう。この南側にも，固い床面が続くところがあった。同様近世陶器が出土している。

東側の桑畑からは，縄文時代前期・中期中葉の土器片（20図23～26）が出土している。台地上になるので遺物の出土は多いと思う。

(11) 北垣外地籍の遺物（20図）

県警察高速アパートの西側の田の下には，深い堀状の溝があった。この溝を水田造成のために埋められている。堀の深さは3mほどに及ぶ。南の藪沿いにあった窪地も堀跡のように思われ，実態がわからないまま道路が作られたが，記録としては大切と思う。

溝中・溝縁から発見された土器片（20図36～53）は，縄文時代前期・中期中葉の爪形・平載竹管文等・中期後葉・後期加曽利3－ⅢB精製土器（52・53）等の土器がみられる。栗屋元3地籍，障子垣外のものと類似し，広域に亙る縄文時代土器の包蔵が伺われる。

(12) 栗屋元遺跡障子垣外地籍の遺物（15・22・23・24・25・26図）

15図の土器は縄文時代中期中葉のもので，諏訪地方の井戸尻式のもの，22・23図の上段は井戸尻Ⅱ式類似のものである。23図下段・24図・25図のものは中期後葉の土器等で，縄文時代中期のいろいろな土器が発見されている。26図は数多くある石器の一部である。この他にも多くの土器が保管され，各期多様の遺物包含されている遺跡で，上郷町の代表的・重要な遺跡であって，学術的な発掘調査も必要な所である。

Ⅳ　発掘調査のまとめ

1，栗屋元遺跡とⅢ地籍の立地

前述のように栗屋元遺跡は，北西から南東にかけて細長く続く微高の台地全域が埋文包蔵地である。西側上方「障子垣外」地籍は，縄文時代中期を主体とする主要遺跡として知られ，巻末に参考資料として載録した遺物発見の多い所がある。比高差7・8 mで続く北垣外遺跡を取巻くように，水田地で連なるⅢ地籍であるから，縄文時代の住居跡の存在が予想された。発掘調査の結果縄文時代中期各様の土器出土は多かったが，土壙群・溝・柱穴群の発見に留まった。この様なことはよくあることで，住居群と墓域としての土壙群・其他の土壙群が地域を異にして検出されることがある。その場合，住居群と土壙群はそう離れた位置には無いのが普通で課題は残る。

縄文時代後期・晩期の遺物が発見されたこと，溝状遺構が多く，夫々方向を異にし，地形傾斜に沿わない方向のものがあること・包含遺物・覆土の相違によって時期差がみられることが特長の一つである。下伊那では発見例の少ない奈良時代の住居跡と場合によっては同時期の竪穴・ピット群・溝等が検出されたこと，縄文時代中期・晩期・弥生時代の土壙等多岐に亙る土壙群が確認されたことも大きな成果である。このことは，詳細分布調査で予想された，縄文・弥生・奈良・平安時代・中世の包蔵地であることを如実に検証したことにもなる。遺跡全体では，夫々各時期の集落・関連遺構が所を替えたり重複して立地しているであろう。栗屋元Ⅲ地籍・Ⅰ地籍・北垣外地籍・障子垣外地籍の調査結果を総合してみると，多岐に亙る複合遺跡の様相の一部が実証され，今回の発掘調査の結果が，近い内に行われる辻線上方の発掘調査等にも大きな示唆を与えることになろう。

2，奈良時代住居跡の発見

奈良時代住居跡の発見例は，飯田市座光寺恒川遺跡での検出は多い。上郷町では飯沼丹保堂垣外遺跡で1軒検出されている。遺物出土の場所は各地にあるが，住居跡の確認は意外と少ないのが現状である。とくに，低位段丘Ⅰから中位段丘上では尚更の状況である。その意味から価値高いことになる。又この用地の中央付近で検出されながら，1軒だけに留まることが気懸かりである。この時期では少なくとも2～3軒の集落をなす例が多い中で，時に1軒だけが単独で検出される例は，平安時代でみられることがある。奈良時代にもその例があるのかもしれない。近くにあった竪穴・溝1又は2が同時期とすれば集落立地上大きな話題を提供することになる。

上郷町では昭和62年以降低位段丘・中位段丘上で多くの発掘調査が予定されているので，場合によっては類似例が出てきて解明される時もあろうかと期待している。

3，多岐に亙る溝状遺構の発見

溝状遺構は6本検出されているが，時期的な違いは覆土，包含土質からみることができる。溝1・2は，古墳時代以降。溝3は縄文時代から弥生時代頃（上方に古墳時代以降の包含層がある場合)。溝4は中世以降。溝5・6は縄文時代，場合によっては中世以降と推測するが，実際は判断が困難である。溝とは単純に考えると水の流れ道と思いやすいが，意外と目的を持って構築されるものも多い。とくに地形傾斜に沿わない溝，途中で角度を変えているものも多い。溝1・2はその仲間に入るものと思われ，集落・生産領域に構築されたものかもしれない。

下伊那地方の低位段丘Ⅰ・中位段丘上には何処でも溝状遺構の発見例が多い。中でも中世期の溝状遺構が目立つ。城郭に関係するもの・生産的な目的を持つもの等である。今回の溝にはこれと言った決め手はないが，原の城に近い栗屋元遺跡の中には，城郭に関連するものもあるに違いない。

4，土壙群の持つ意味

70基以上の土壙が検出されている。出土遺物から時期が判断できるものは弥生時代3・縄文時代晩期3・あとは縄文時代中期か時期不詳と言うことになる。土壙とは土中に穴を掘り下げ，墓地にしたり，貯蔵に使ったり，狩猟に使ったりする穴のことである。中には木の根で掘られたり，何等かの影響で穴になる場合もあろう。でも墓地や貯蔵の穴でなくても人の生活がなければそう穴の開くものではない。又部分的な発掘作業では見落とされ易い遺構でもある。土器片の出土が多いことと併せて，近くに住居跡があるに違いない。郵政局のご理解を得て，全面に近い発掘調査が出来たことが，多くの土壙を検出出来たものと深く感謝している。

上郷町の中で，1つの遺跡範囲の中で3回以上に亙って発掘調査が実施された例は少ない。1つ1つが部分的な調査であってもやがて果たされる成果は大きい。栗屋元遺跡の中でも，事前の発掘調査がなされないまま遺跡の破壊がなされた所も多い。その中で多額の調査費を計上し，忙しい工期の中で充分な調査を遂行させて戴けたことにも感謝しながらまとめの筆をおく。

後　　記

昭和61年度信越郵政局飯田２号宿舎建設の土地，黒田28番地１，同29番地１は当町の周知の埋蔵文化財包蔵地栗屋元遺跡となっています。このため埋蔵文化財の保護の立場から信越郵政局と専門家を交えて協議した結果，御理解と御協力が得られ事前に発掘調査を実施し，記録保存を図ることにしたのです。

今回の発掘調査は宿舎の建設が急がれている中で緊急を要するものでしたが，当町で丁度折良く，保護協議を経て栗屋元遺跡と隣接する北垣外遺跡内の町道辻線拡幅改良新設工事に先がけて実施していた同遺跡他の発掘調査との調整がついたため引続き委託事業として実施しました。

一連の発掘調査を大別すると60年度実施の栗屋元遺跡発掘調査Ⅰ（町道辻線），同年度の北垣外，栗屋元遺跡発掘調査Ⅱ，それに今回60年度内から61年度にわたる栗屋元遺跡発掘調査Ⅲとになります。町道辻線に関る工事は昭和60年度から数年度にかけて順次実施されることもあって，今回栗屋元遺跡発掘調査Ⅲを中心に周辺の状況とあわせて１つの報告書とした方が，統一的に同遺跡の状況把握ができて便利なので集中してまとめることにしました。

障子（精進）垣外地籍を含む栗屋元遺跡は以前より遺物が多い所として知られ，特に注目の遺跡の１つですが，今回の発掘調査によってその一端が明らかにされ地域の今後の考古学上欠くことのできない資料を得ることになったことは喜ばしいことです。

一連の遺跡発掘調査の調査団長には考古学者の今村善興先生にお引受け願い，献身的な御尽力によって本書の成果を得ることができましたことは幸甚でありお礼を申しあげます。この間，調査土地の所有者の皆さんの御協力はもとより，その承諾事務，作業員の確保等について中田裕康町議が奔走してくださったこと。水道設備他無償提供してくださった下黒田片桐信一氏，同北原新吉氏，栗屋元遺跡内障子（精進）垣外地籍で出土した大量の石器土器を提供してくださった別府上長谷川真澄氏等のご協力に深く感謝申しあげます。又調査全般にわたり長い期間調査員調査補助員作業員としてご協力くださった方々誠に有難うございました。

末筆ながら栗屋元遺跡の発掘調査について深い御理解と御支援をいただきました信越郵政局と飯田郵便局の関係者係官の皆さんに敬意を表するとともに厚くお礼を申しあげます。

遺物は大切に保存し，結果は記録保存として後世のため，又学術資料としてまもっていく所存であり，この意義は極めて大きいと確信いたします。

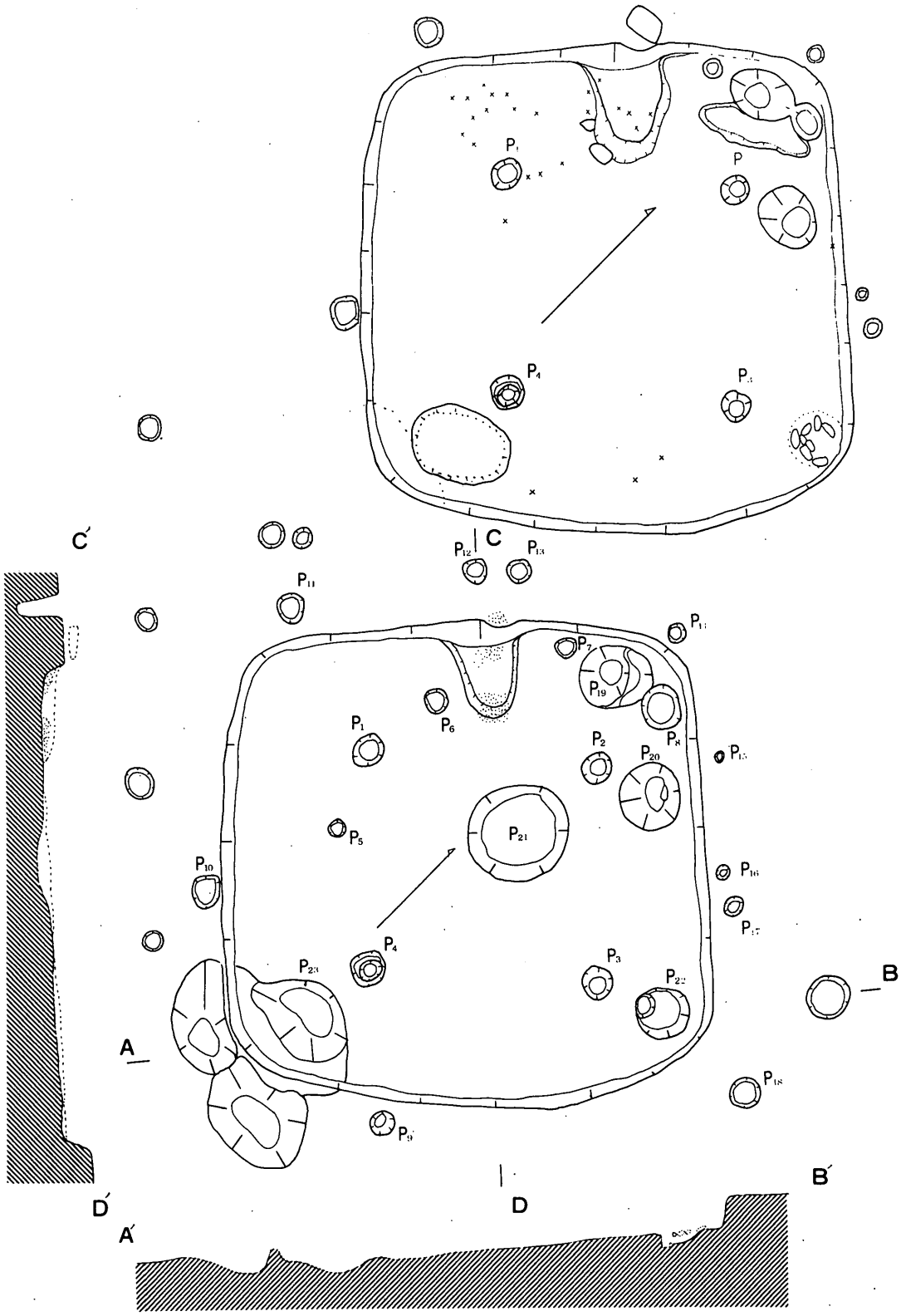
昭和61年10月

上郷町教育委員会

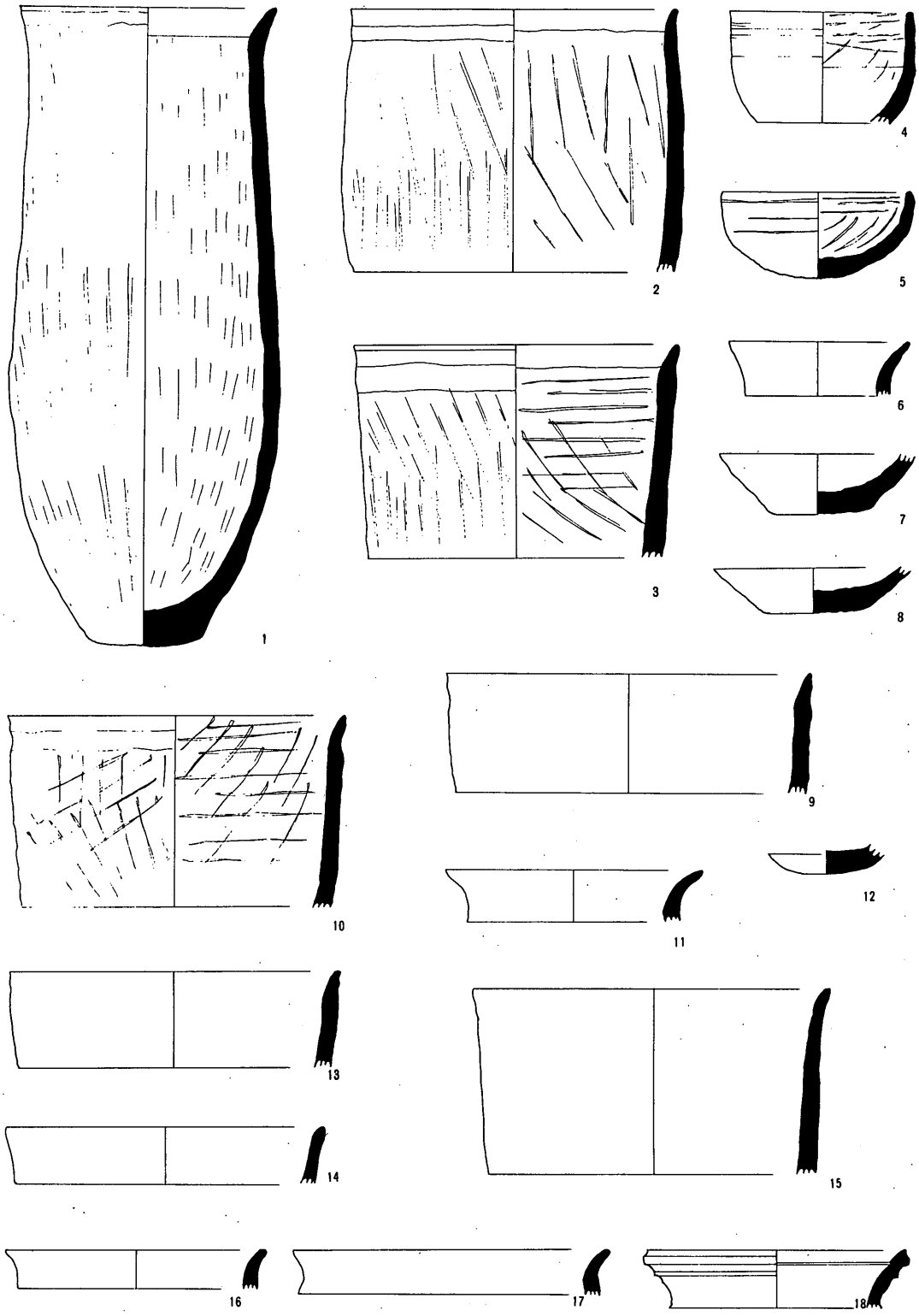
19. ミカド　20. 増田　21. 今村　22. 見城垣外　23. 栗屋元　24. 北垣外　25. 原の城A
26. 原の城B　27. 福島　28. 垣外　34. 三反田　35. 高松原　36. 目光原　37. 川底
38. ドドメキ　81. 川底古墳　82. ドドメキ1号　83. ドドメキ2号　102. 原の城跡
A. 大門町　B. 大雄寺付近　C. 旧風越高校　D. 浜井場　E. 藤山　F. 伝馬町
1. 調査地点　2. 溝・石垣　3. 竪穴　4. 住居址と建物址・竪穴

第1図　栗屋元遺跡の位置と周辺の遺跡

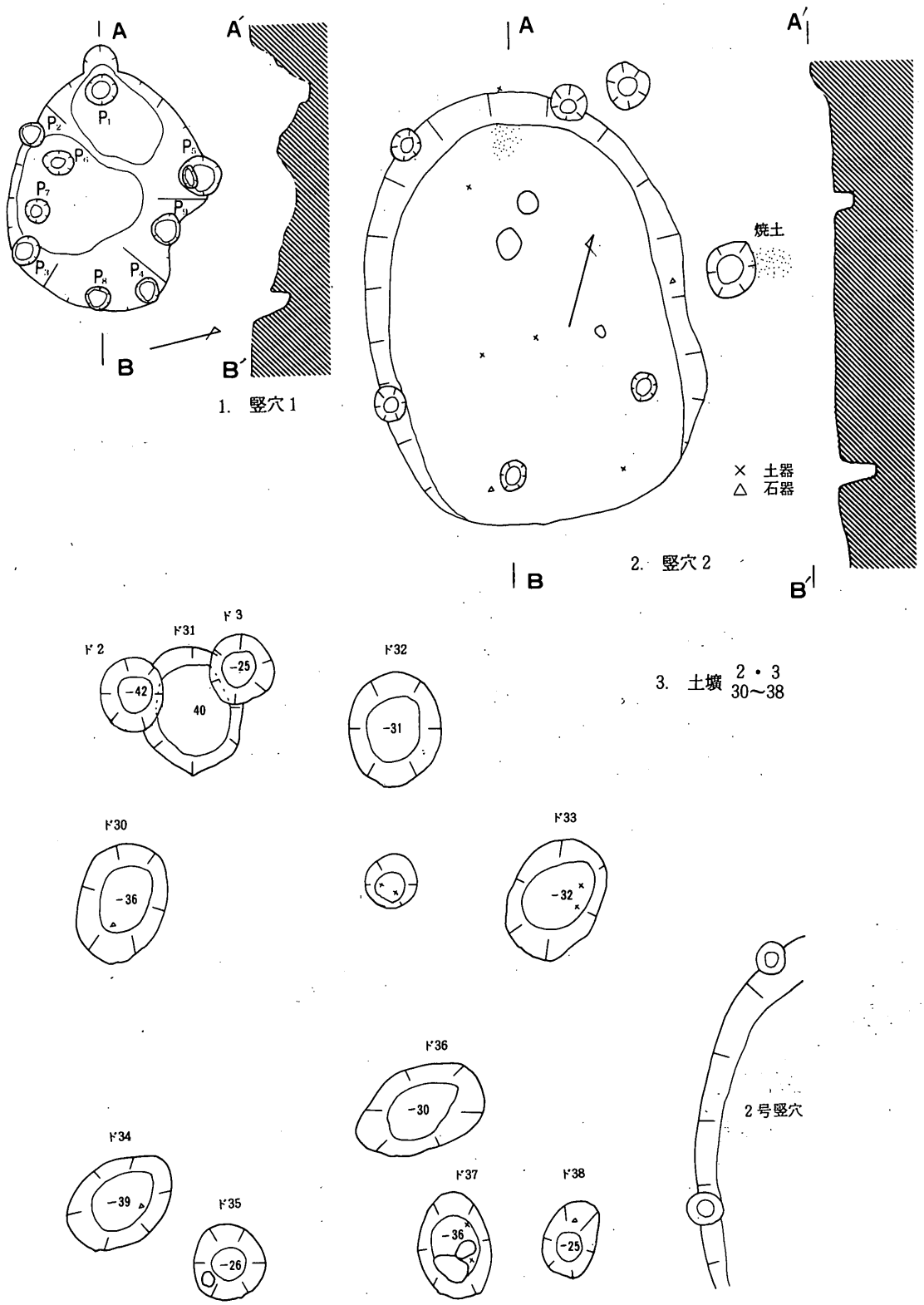
第2図　栗屋元遺跡Ⅲ地籍の遺構全体図



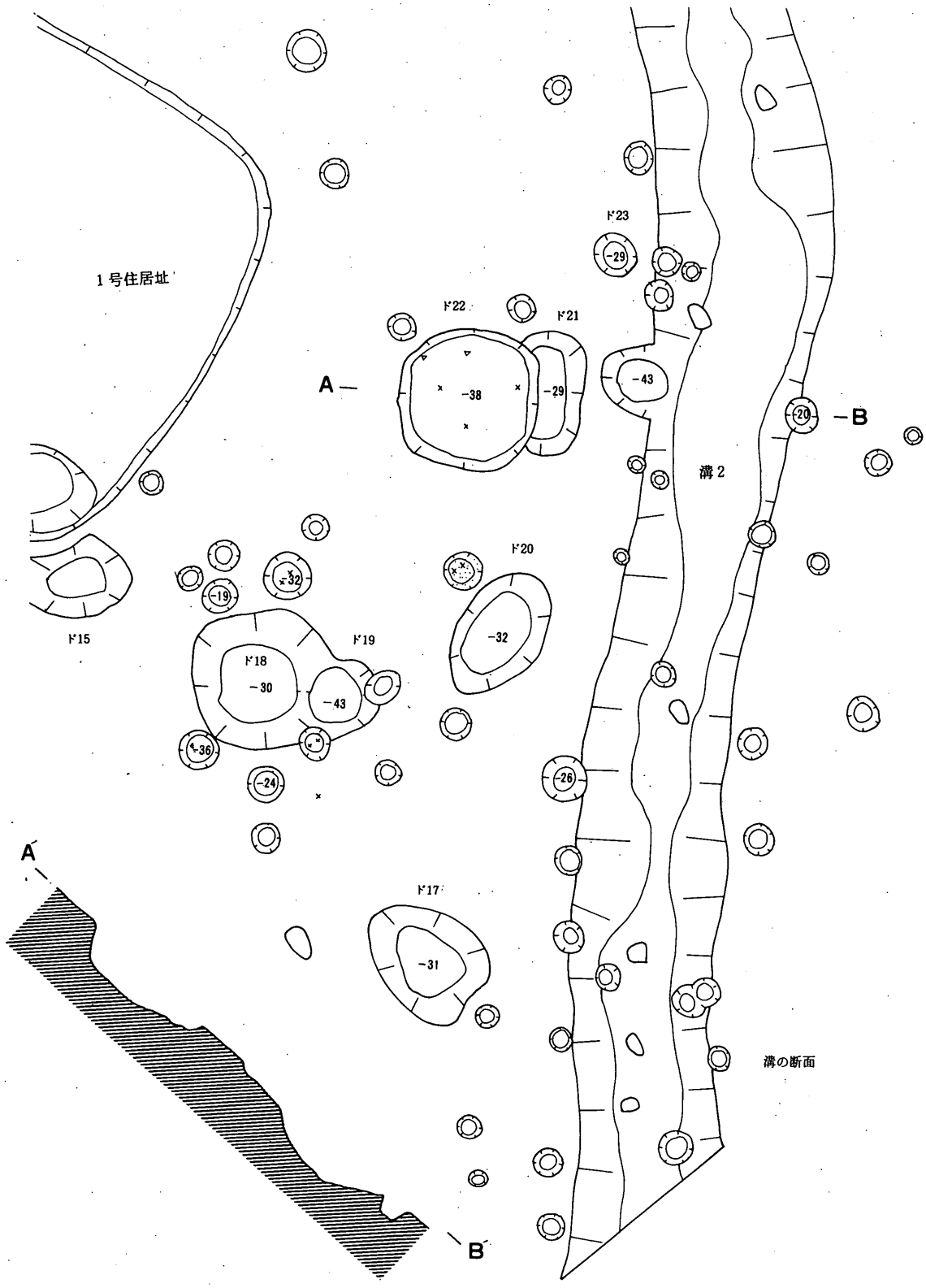
第3図　1号住居址　上層と下層（1：60）



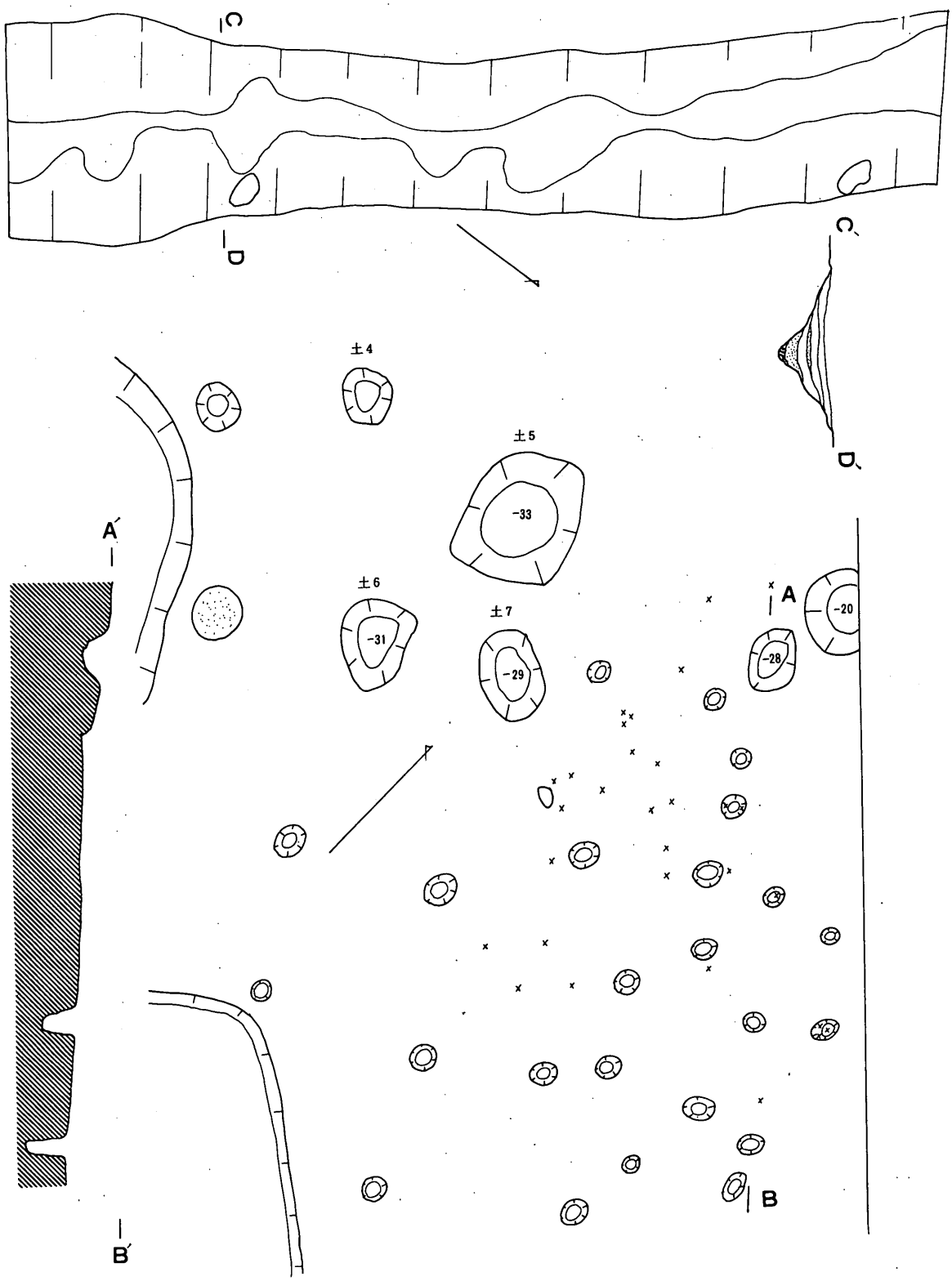
第４図　１号住居址出土土器（１：４）



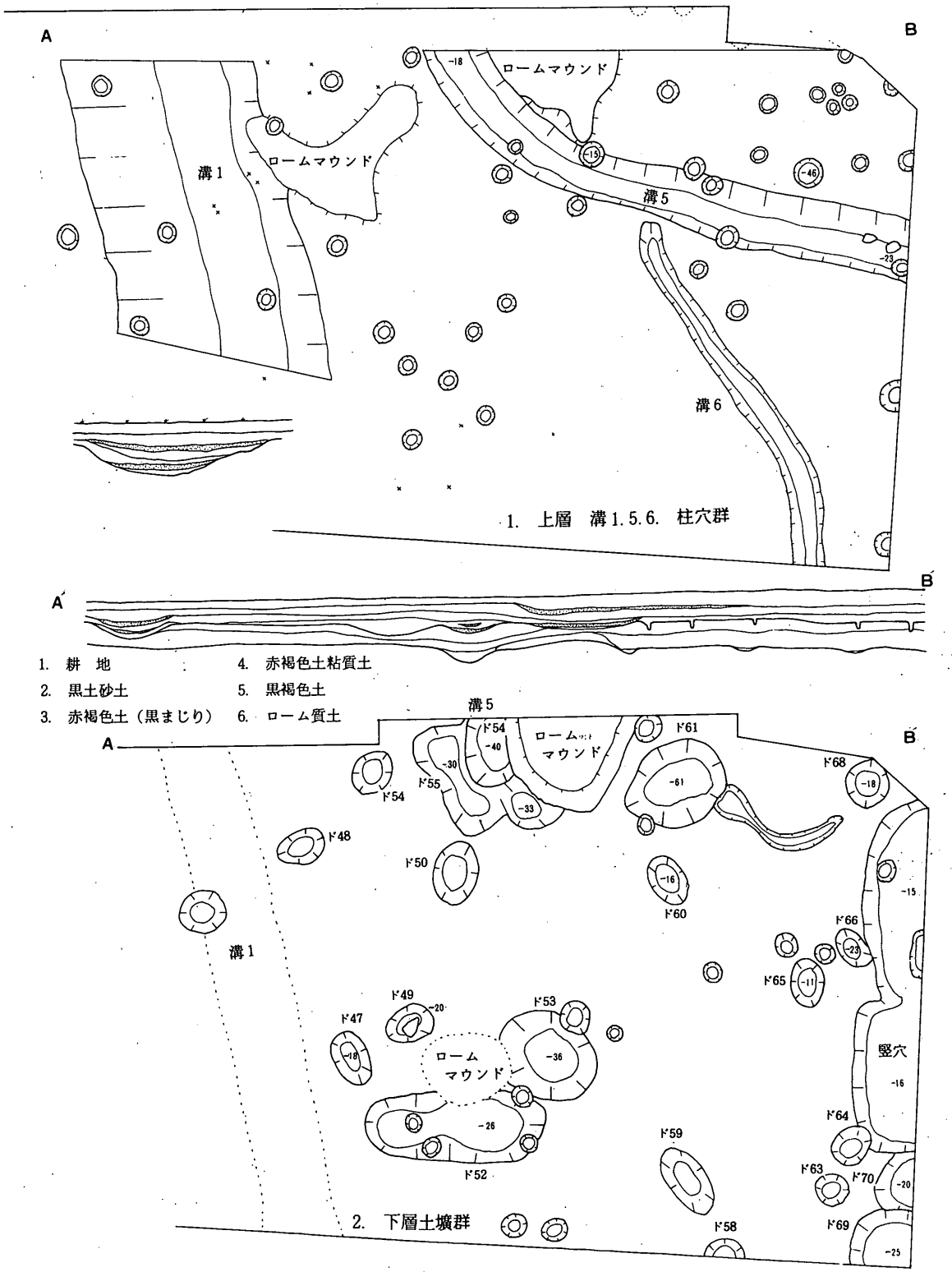
第5図　1・2号竪穴、土壙 2・3 30～38（1：60）



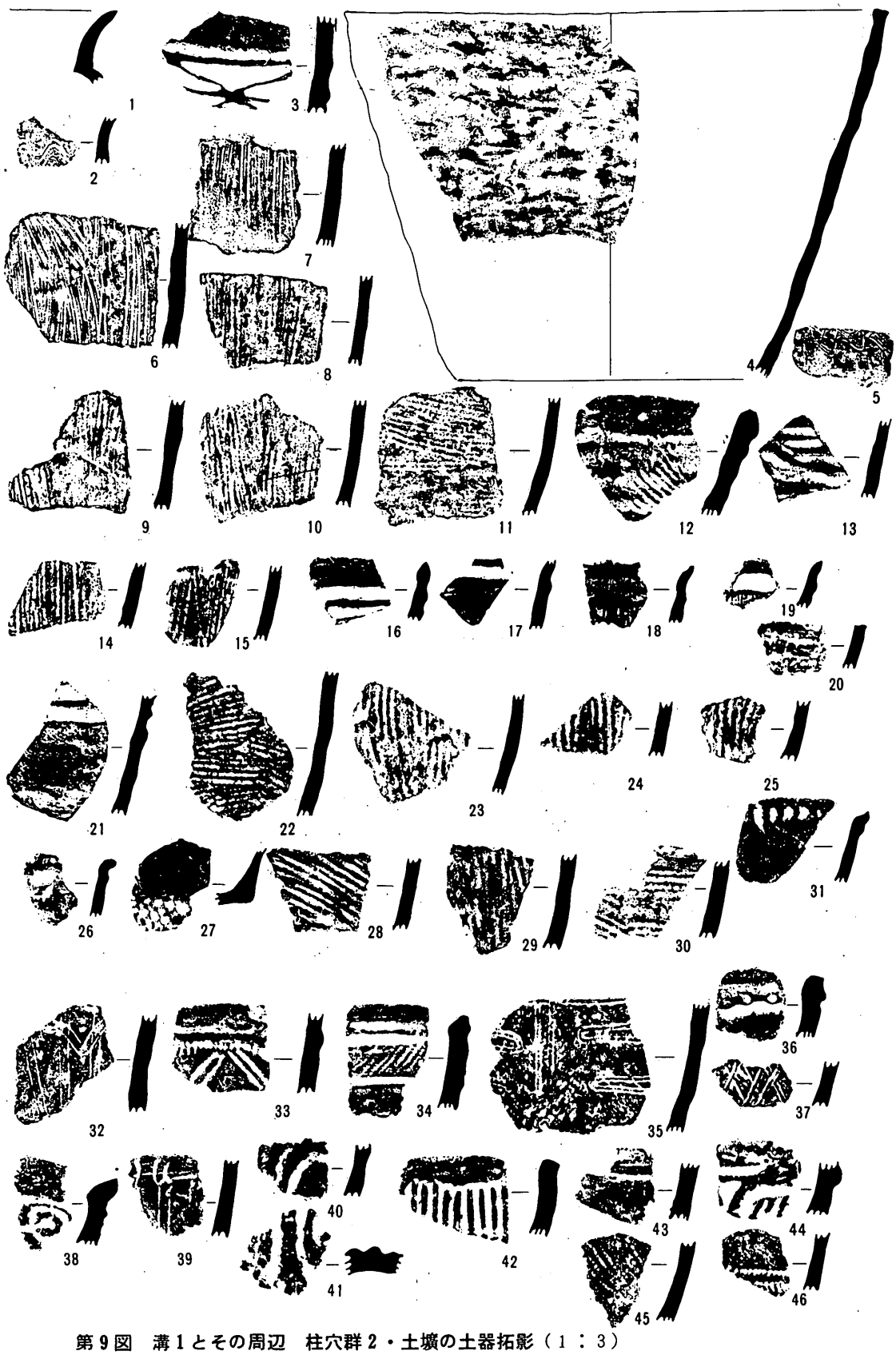
第6図　溝状遺構2、土壙17～22（1：60）



第7図　溝3・柱穴群Ⅱと土壙4～9（1：60）

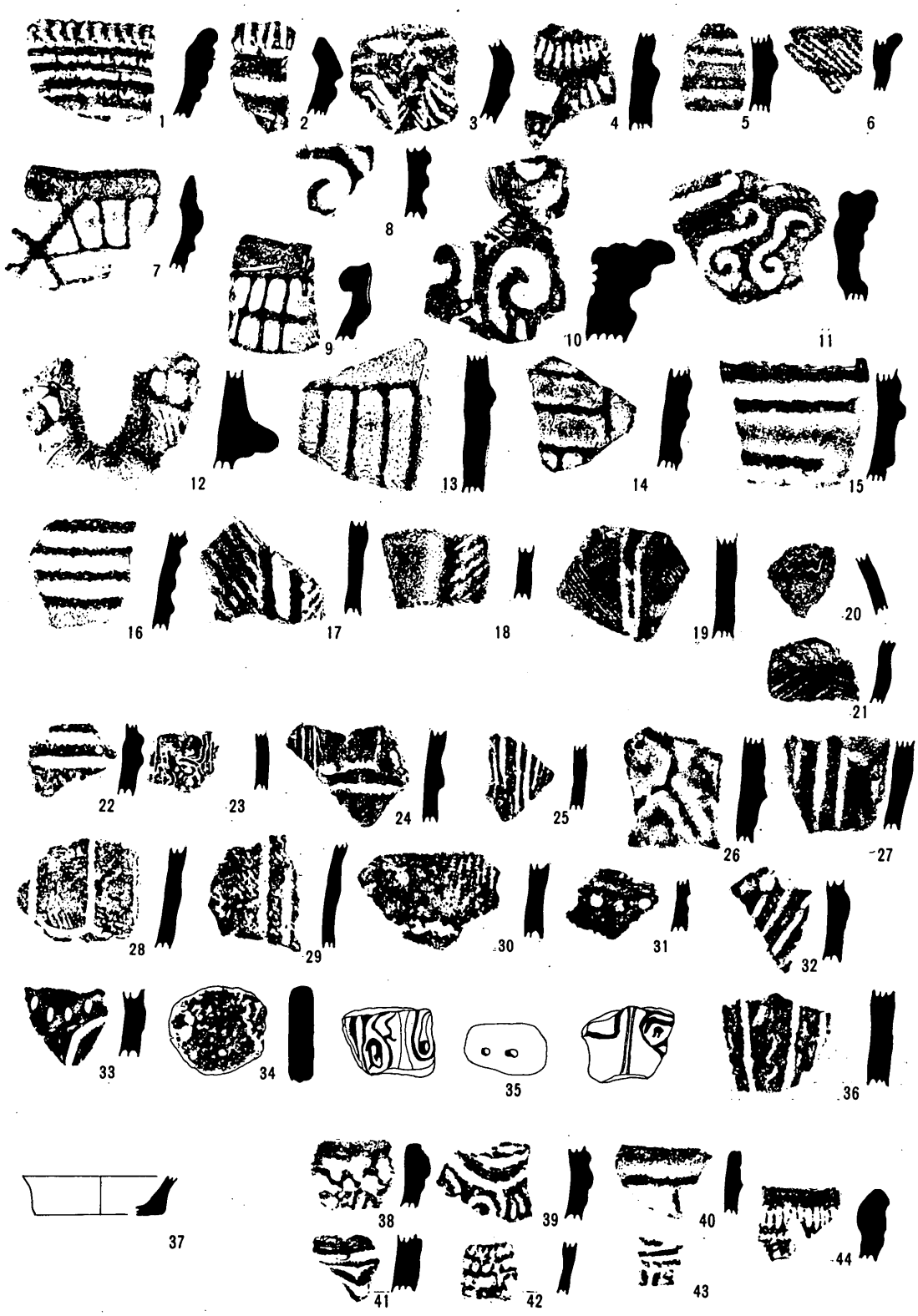


第8図 東側隅溝1・5・6、柱穴群（上層）・土壙40～70（1：80）

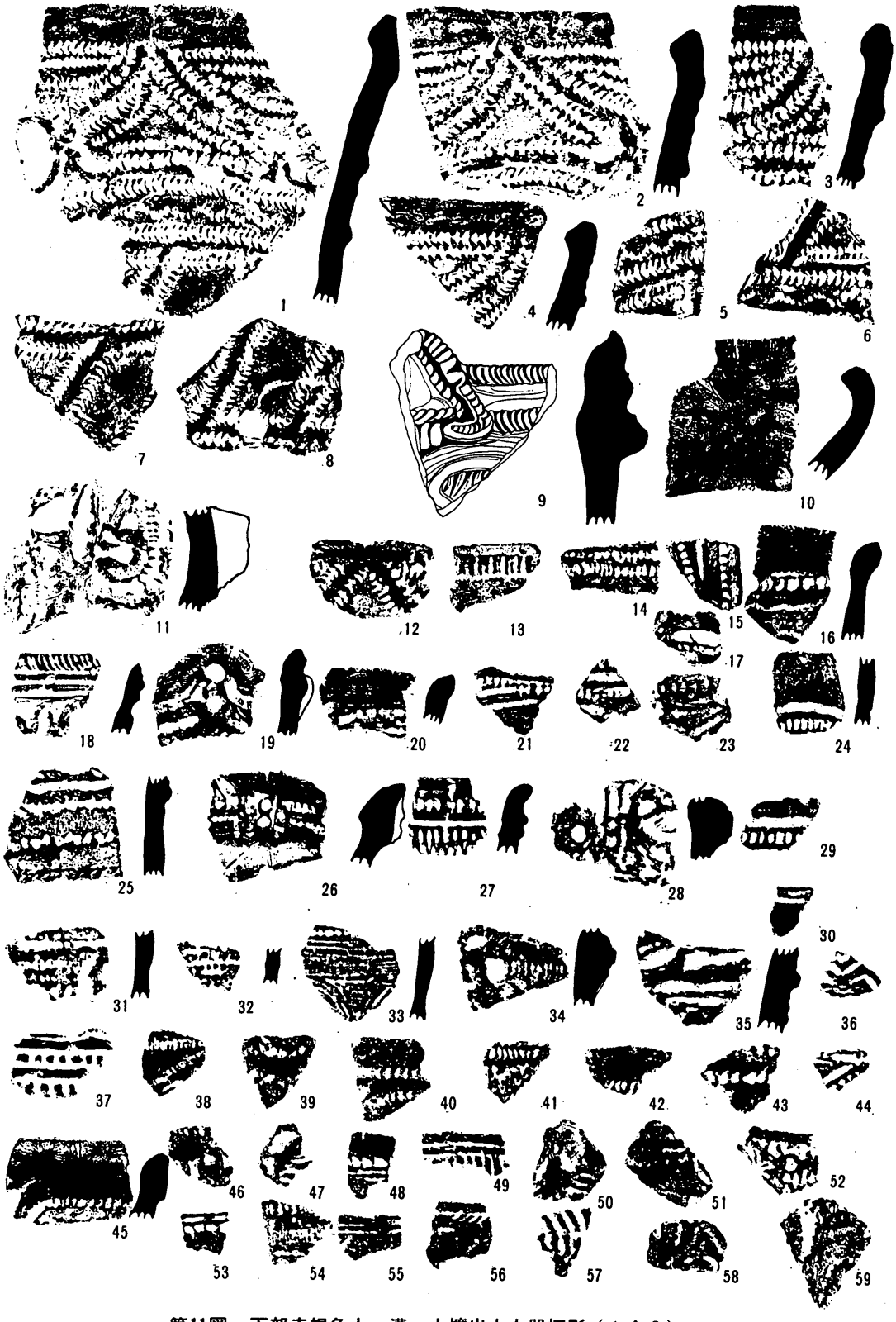


第9図　溝1とその周辺　柱穴群2・土壙の土器拓影（1：3）

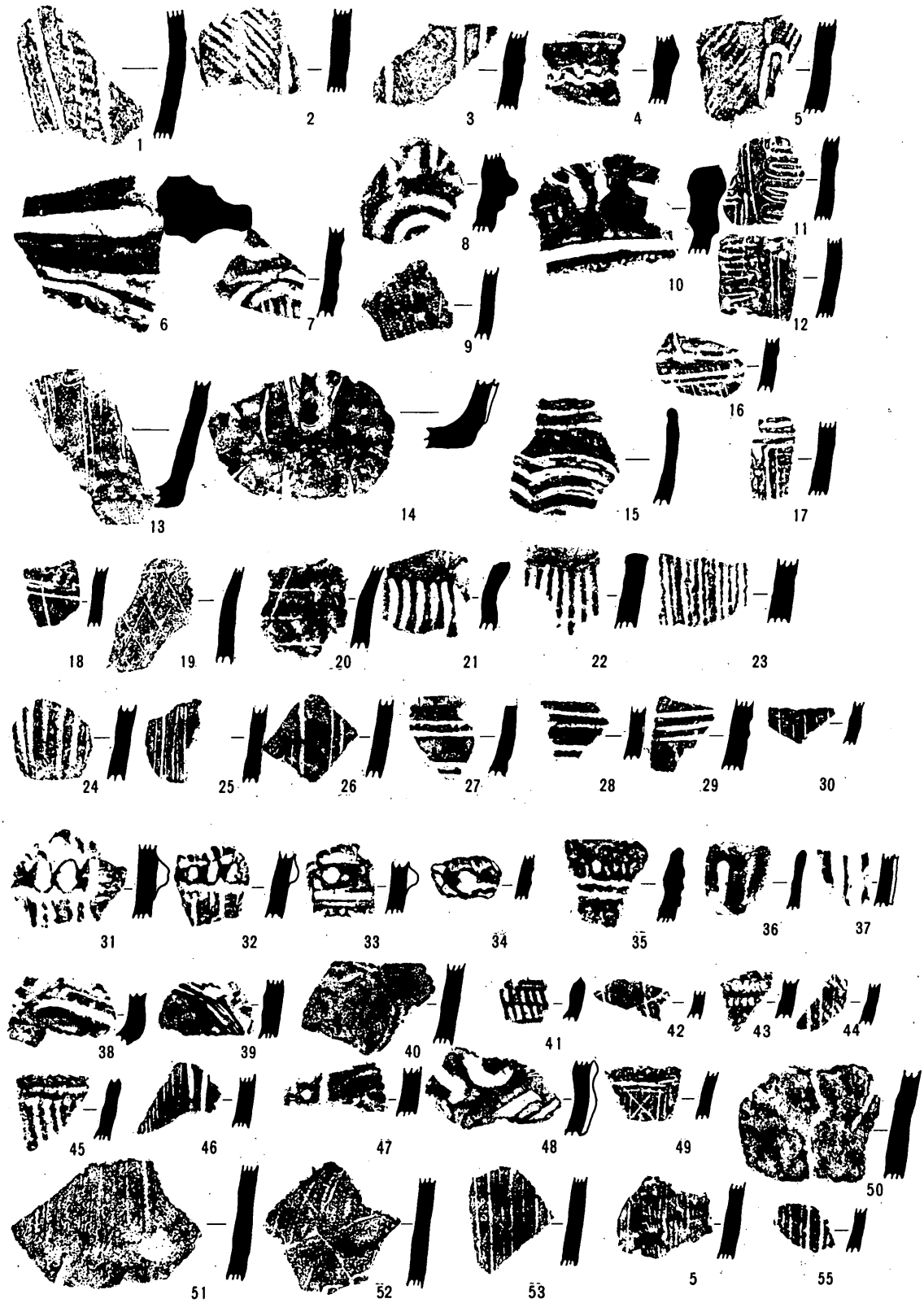
溝1とその周辺1～5　柱穴群Ⅱ6～21、32～37　土壙13…22　土壙21・23～27
土壙22…28～30・35～37　土壙21…40　土壙38・42・43・45　土壙25・41
土壙55・44・46



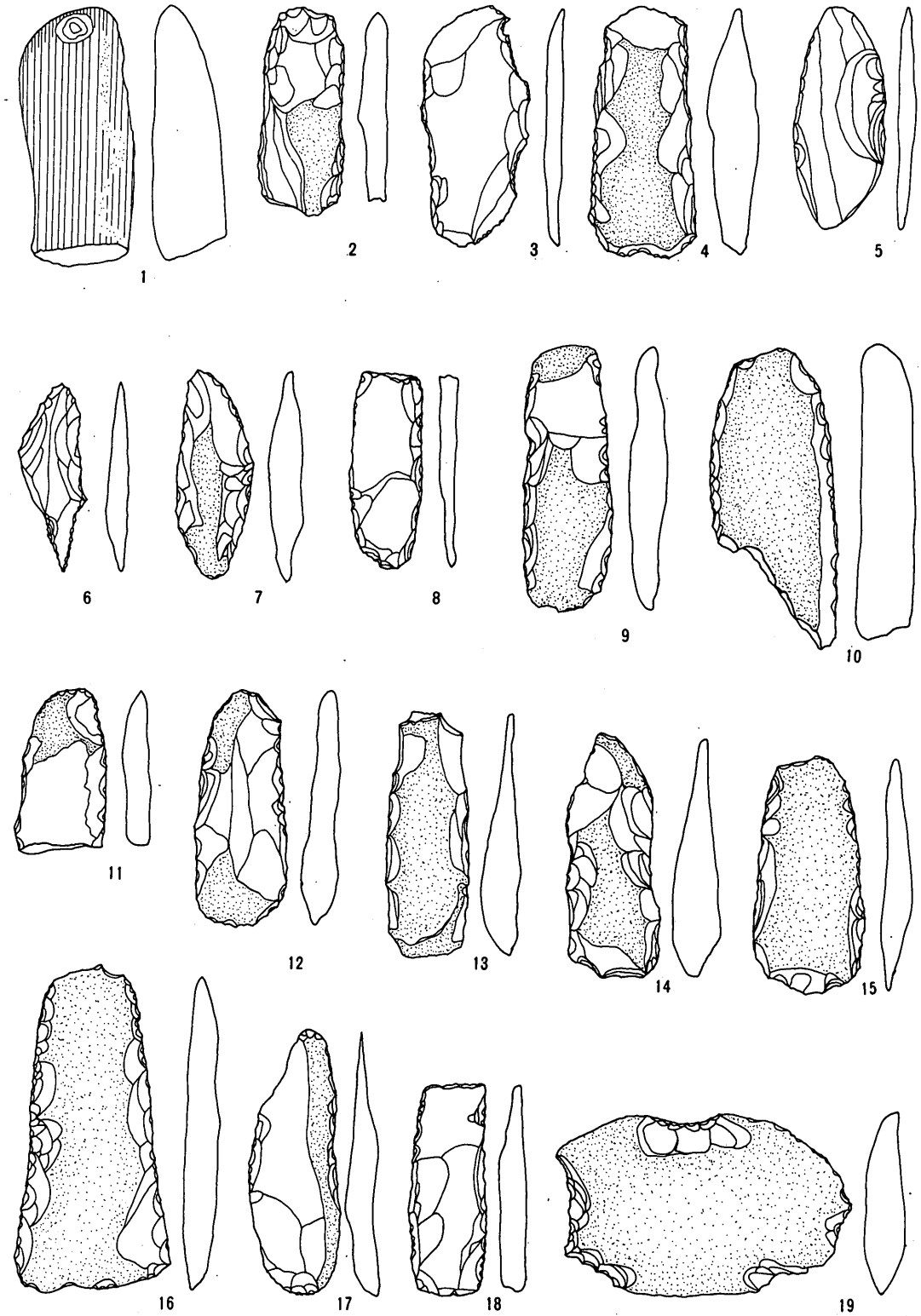
第10図　溝状遺構　2・3・4・5出土土器拓影（1：3）
1～21・31・32・36溝3　22～35（除31・32）溝2
37…溝4　38～44溝5



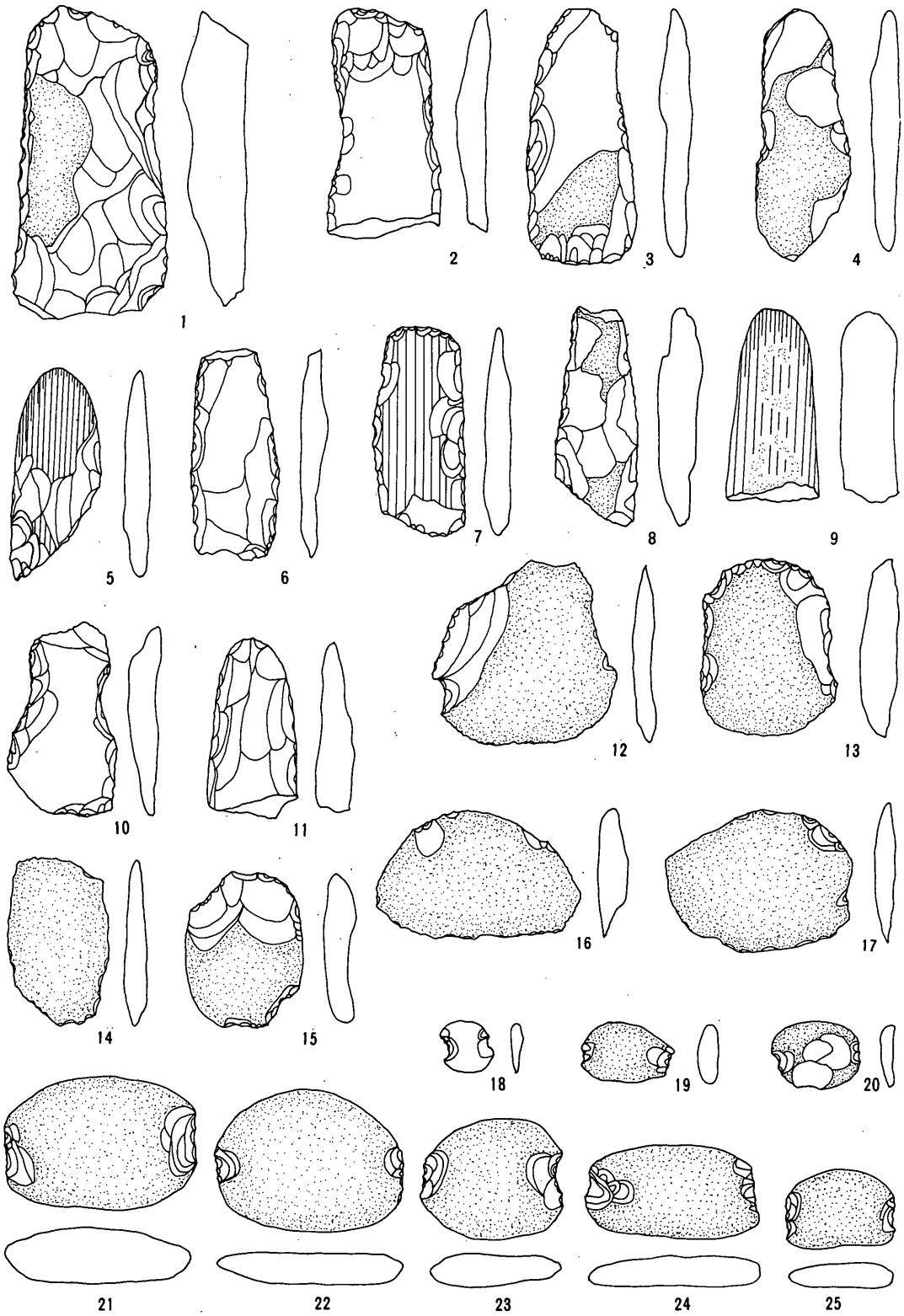
第11図　下部赤褐色土、溝・土壙出土土器拓影（１：３）
１～８東側下層　土壙58付近　18～29溝３　33～59東側土壙群



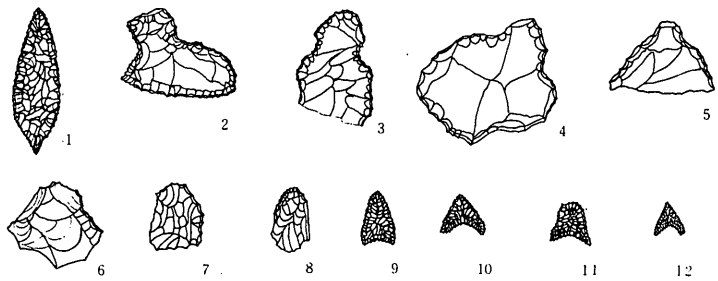
第12図　遺構、各グリット出土土器拓影（1：3）

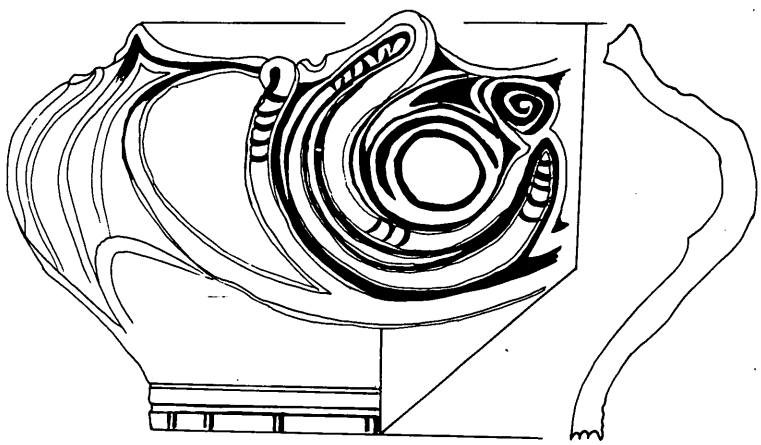


第13図　土壙・グリット出土の石器１（１：３）

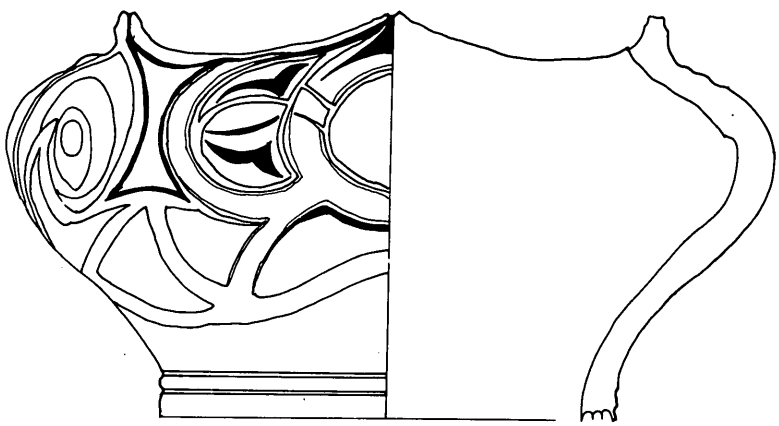


第14図　土壙、各グリット出土の石器２（１：３）

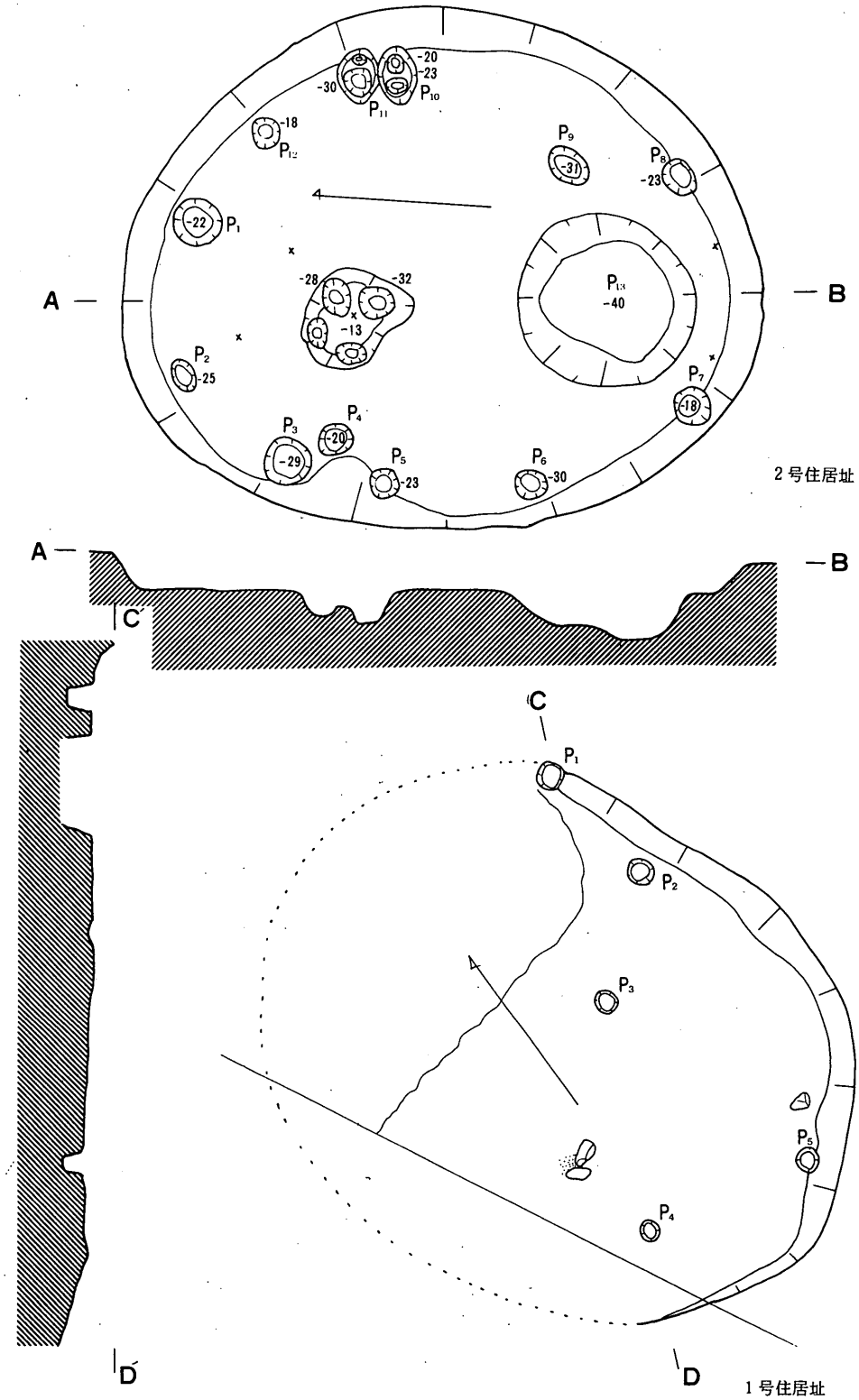




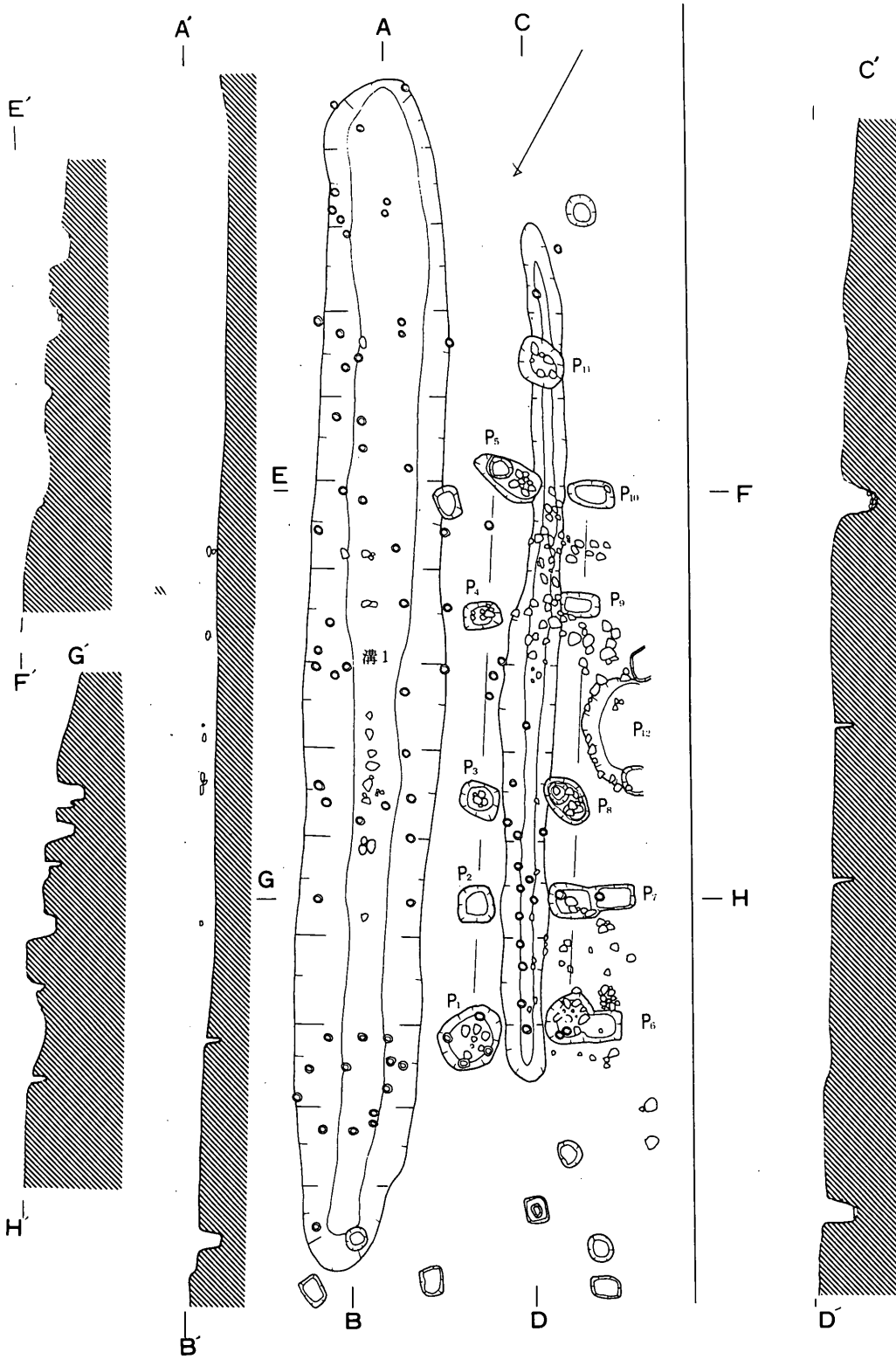
13



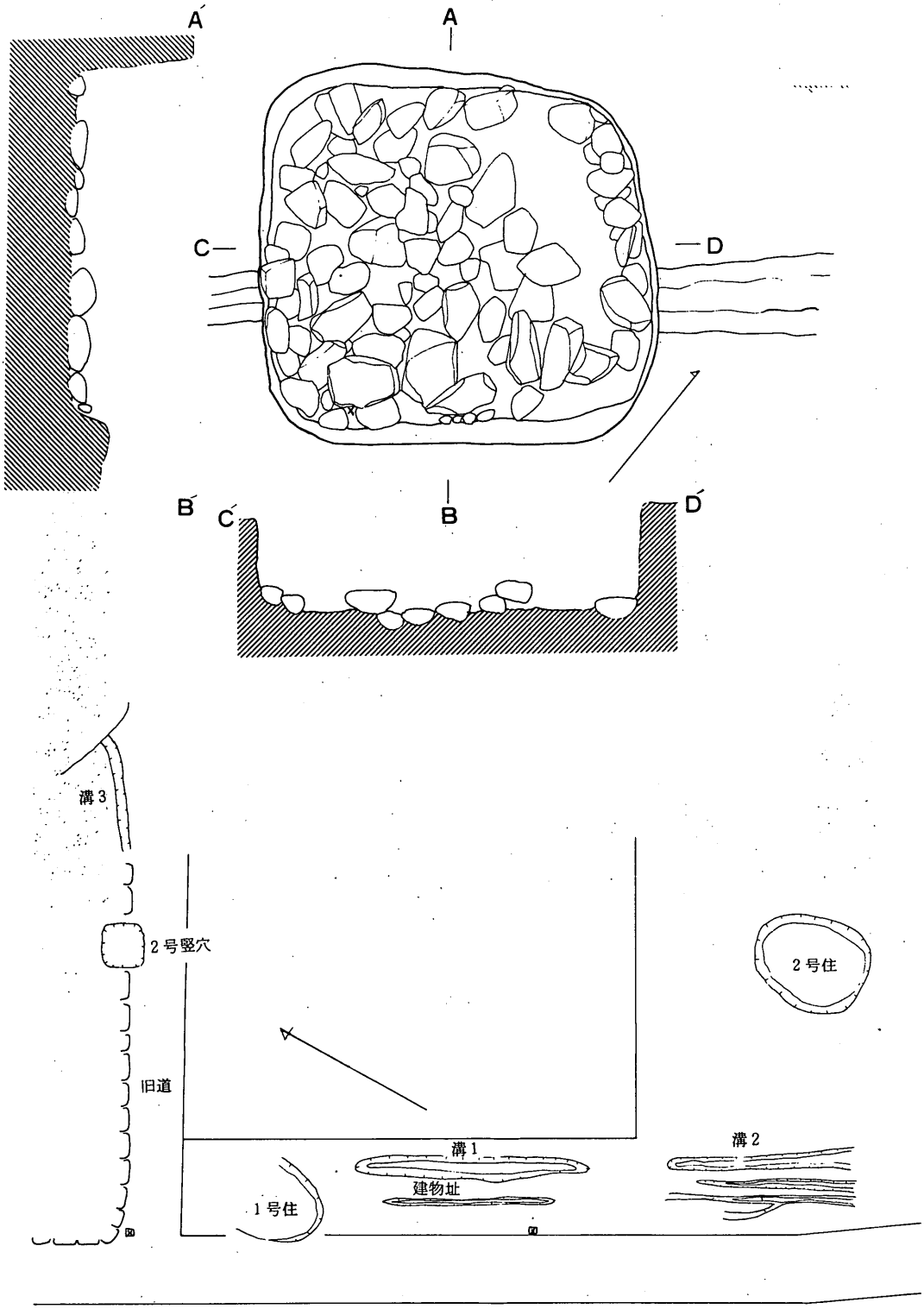
第15図　栗屋元地籍出土有舌ポイント、石匙、スクレーパー石鏃（1：2）
障子垣外地籍出土深鉢形土器（1：3）



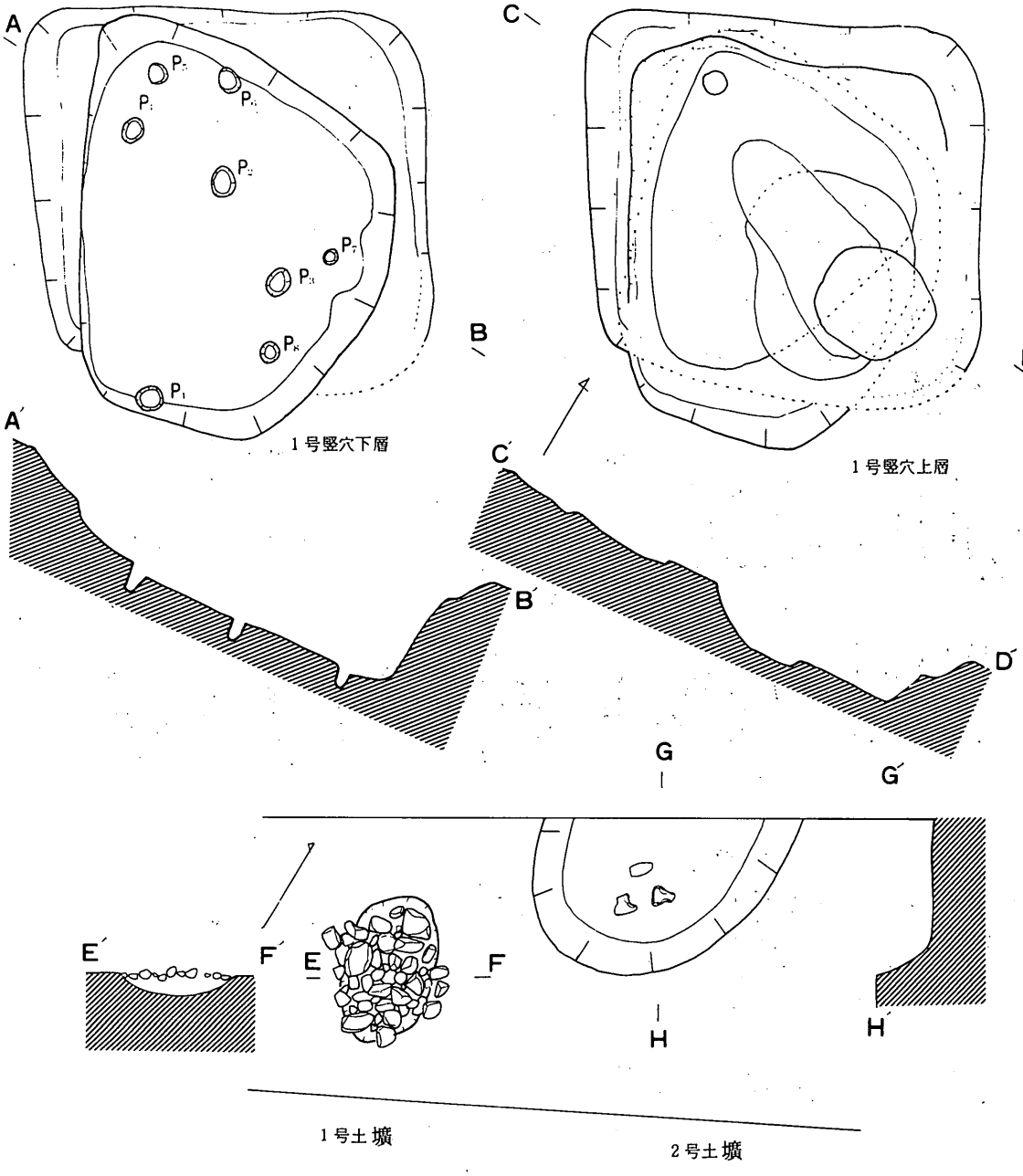
第16図　栗屋元Ⅰ地籍　1号住居址・2号住居址（1：60）



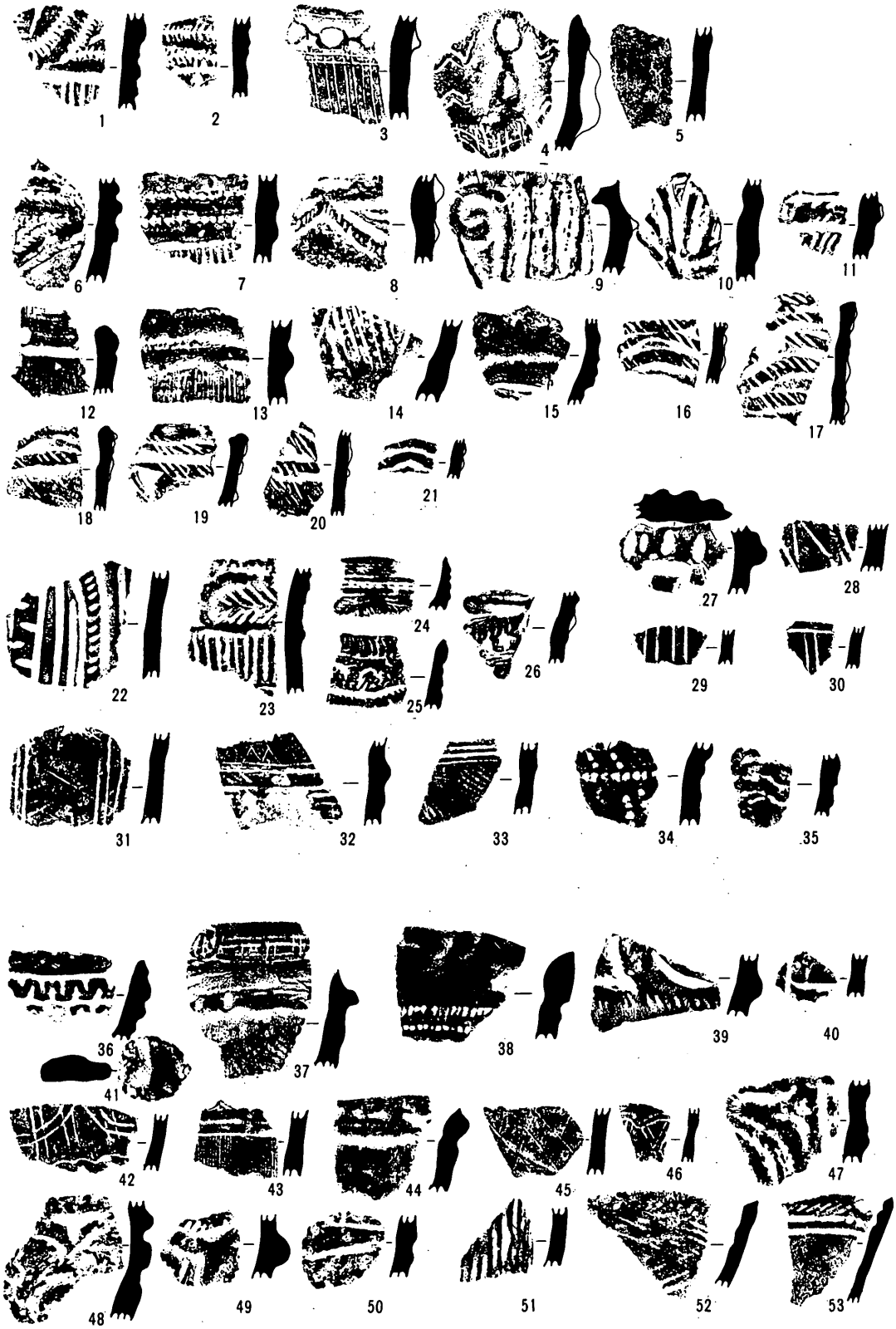
第17図　栗屋元Ⅰ地籍　溝状遺構1と建物址（1：60）



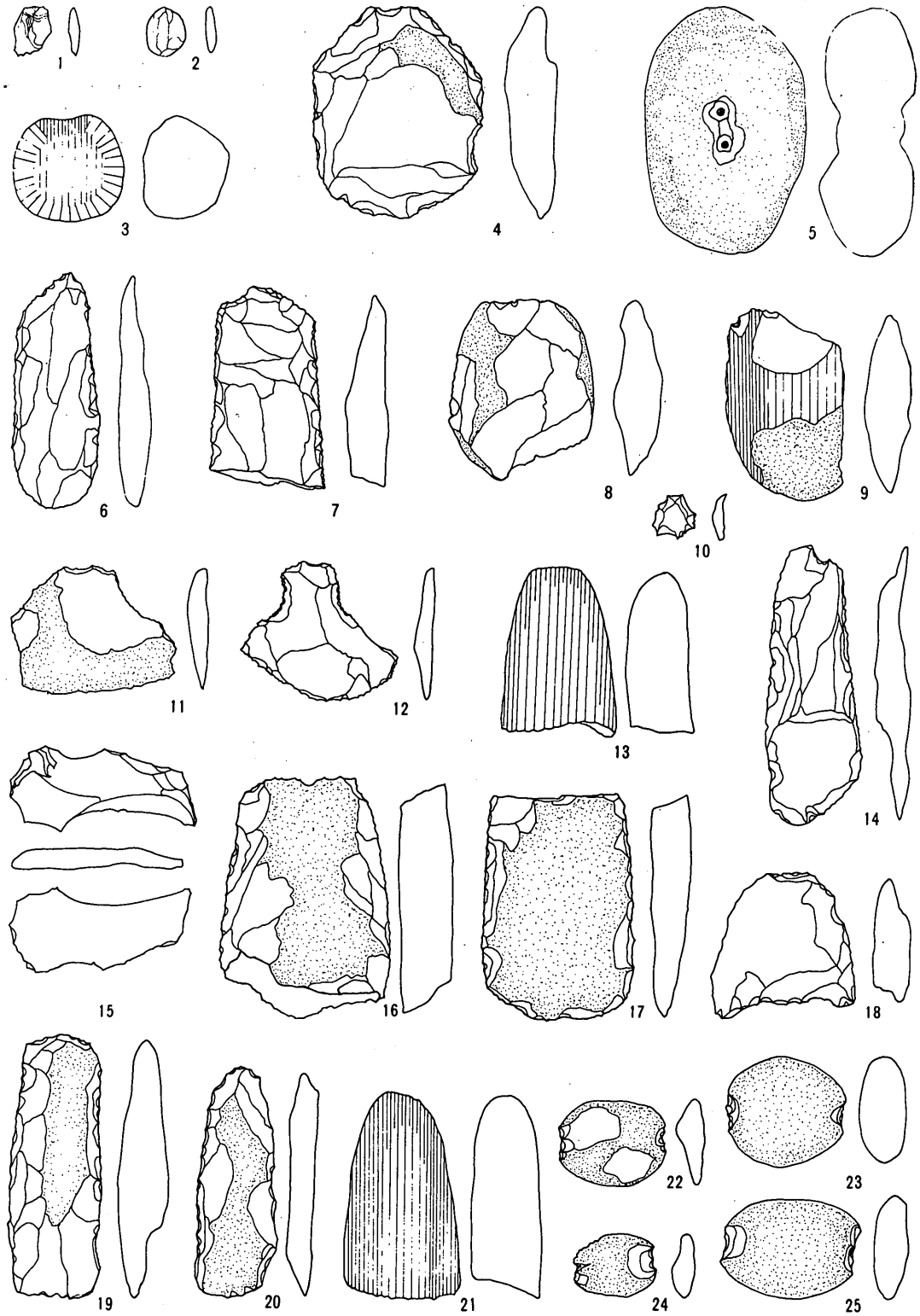
第18図　栗屋元Ⅰ地籍　遺構配置（1：150）2号竪穴（1：60）



第19図　栗屋元Ⅰ地籍　1号竪穴と土壙1：2（1：60）



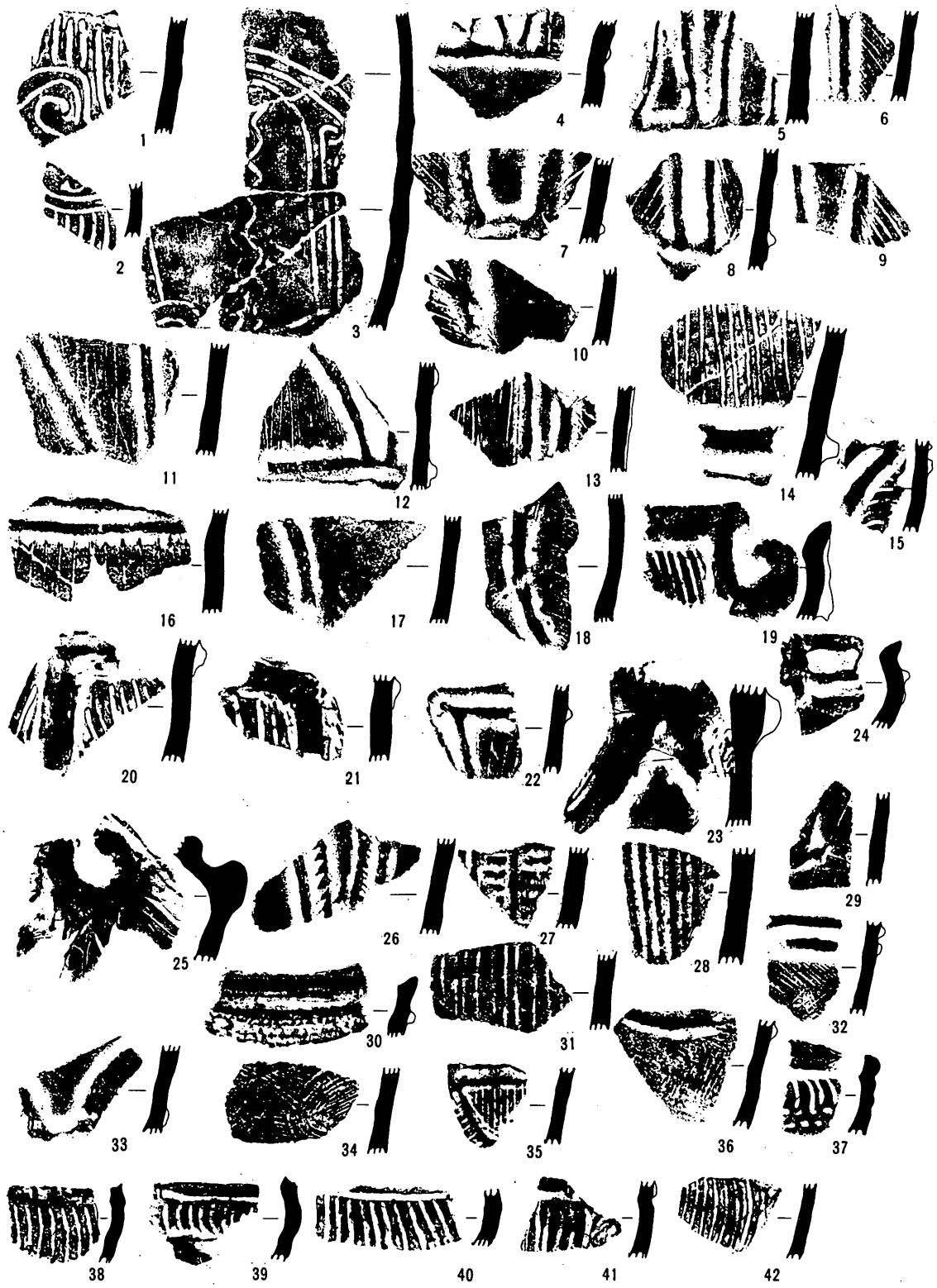
第20図　栗屋元Ⅰ地籍1・2号住居址（1～21）、土壙、グリット（22～35）
栗屋元Ⅱ地籍出土土器（36～53）拓影（1：3）



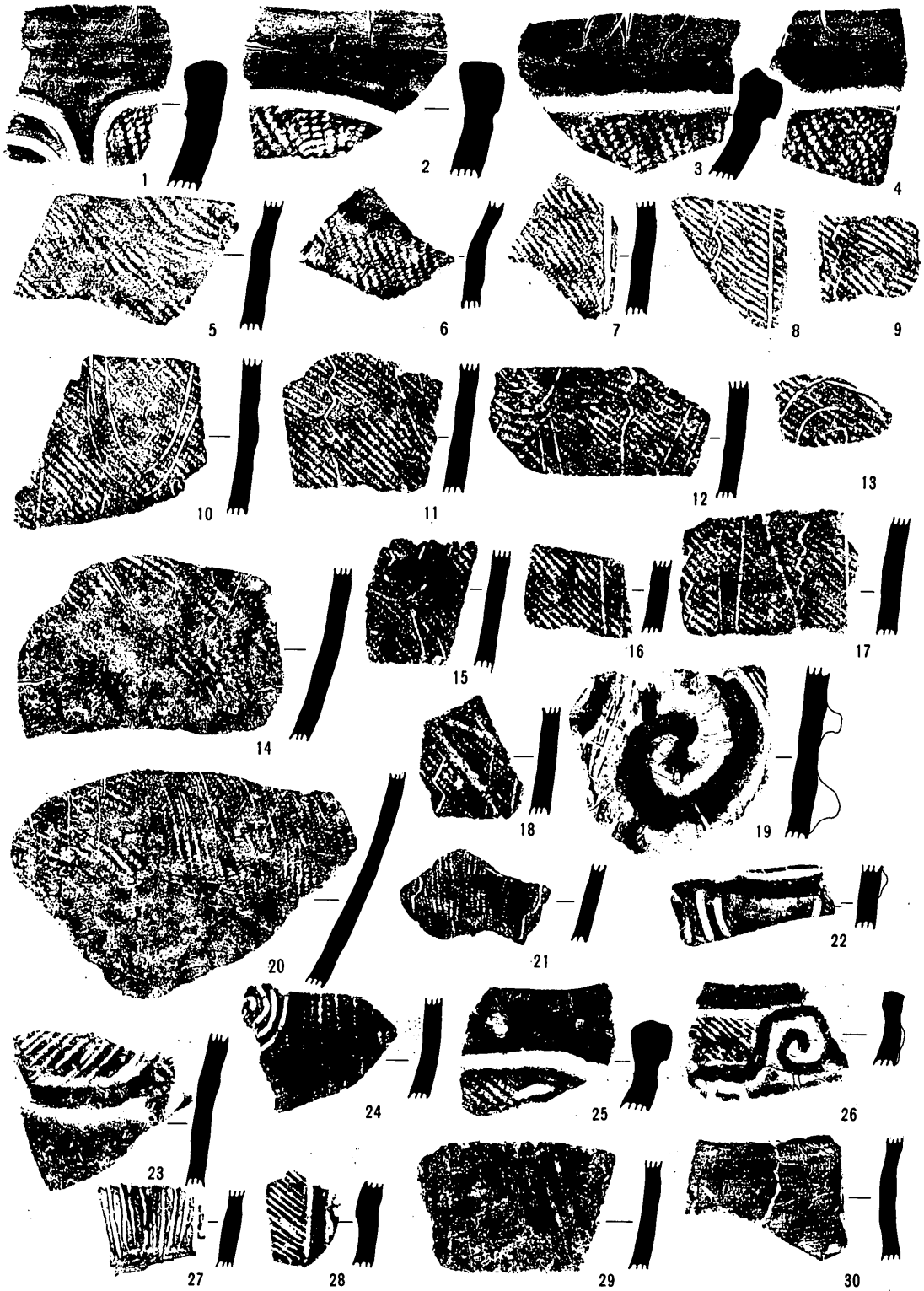
第21図　栗屋元Ⅰ地籍出土石器（1：3）
1～3　1号住　4～10　2号住　11～14　2号土壙　15～25　グリット

第22図　障子垣外地籍出土土器　拓影1（1：3）

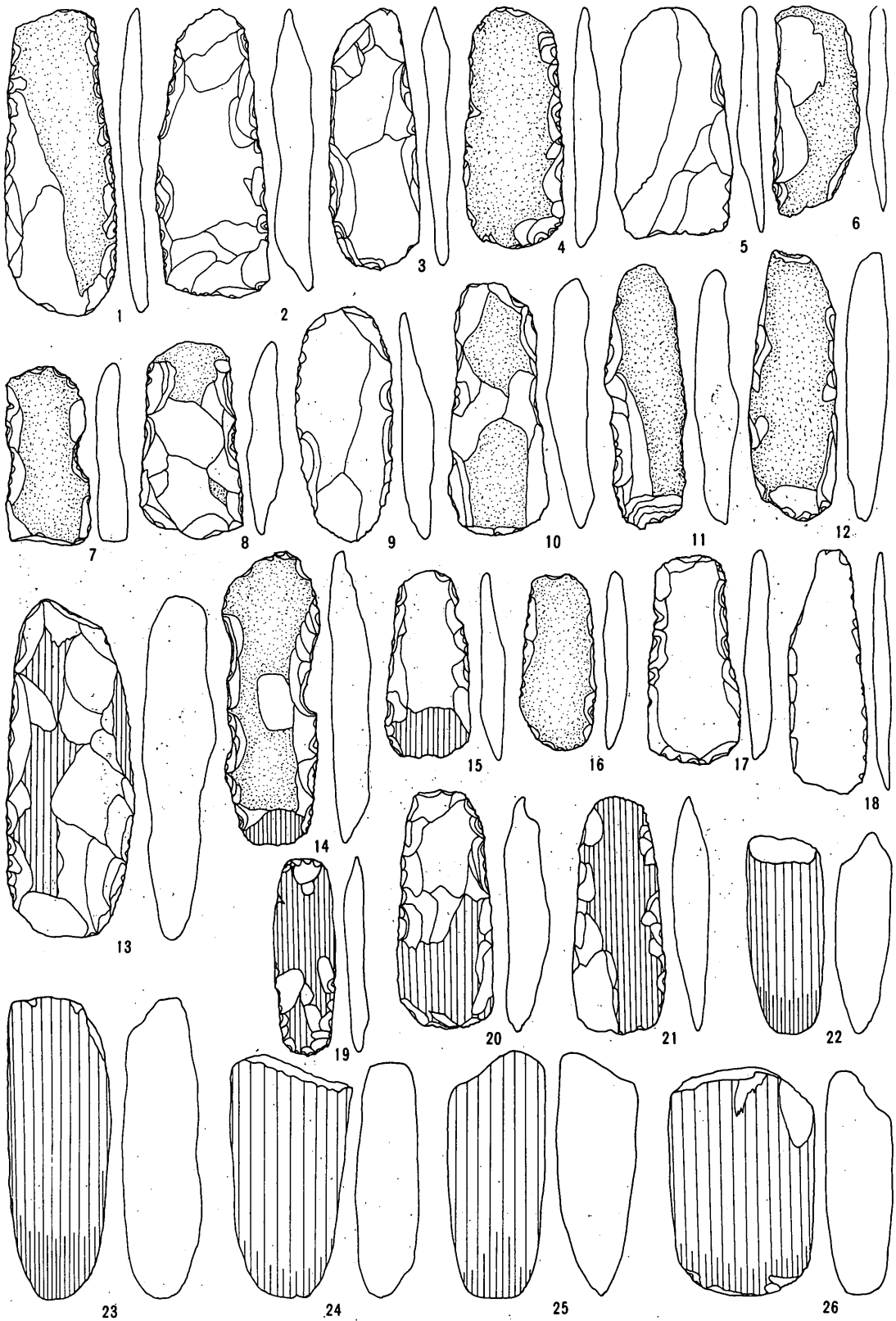
第23図　障子垣外地籍出土土器　拓影２（１：３）



第24図　障子垣外地籍出土土器拓影３（１：３）

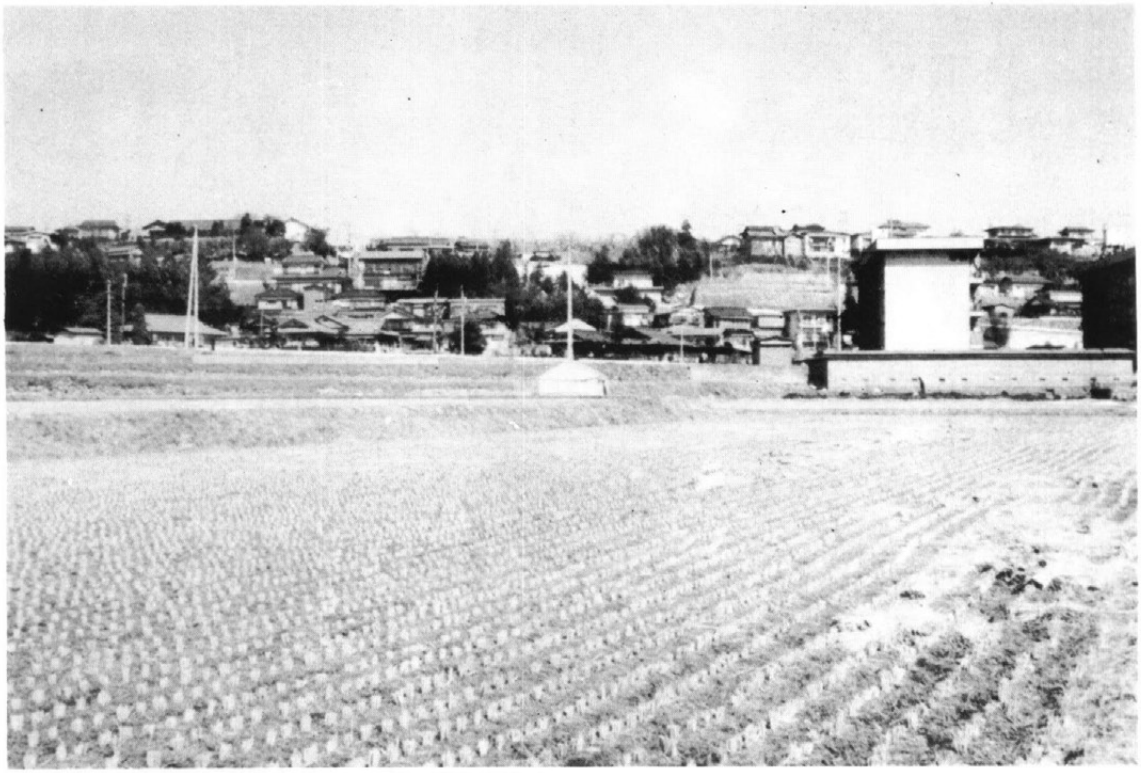


第25図　障子垣外地籍出土土器　拓影４（１：３）



第26図　障子垣外地籍出土石器（1：3）

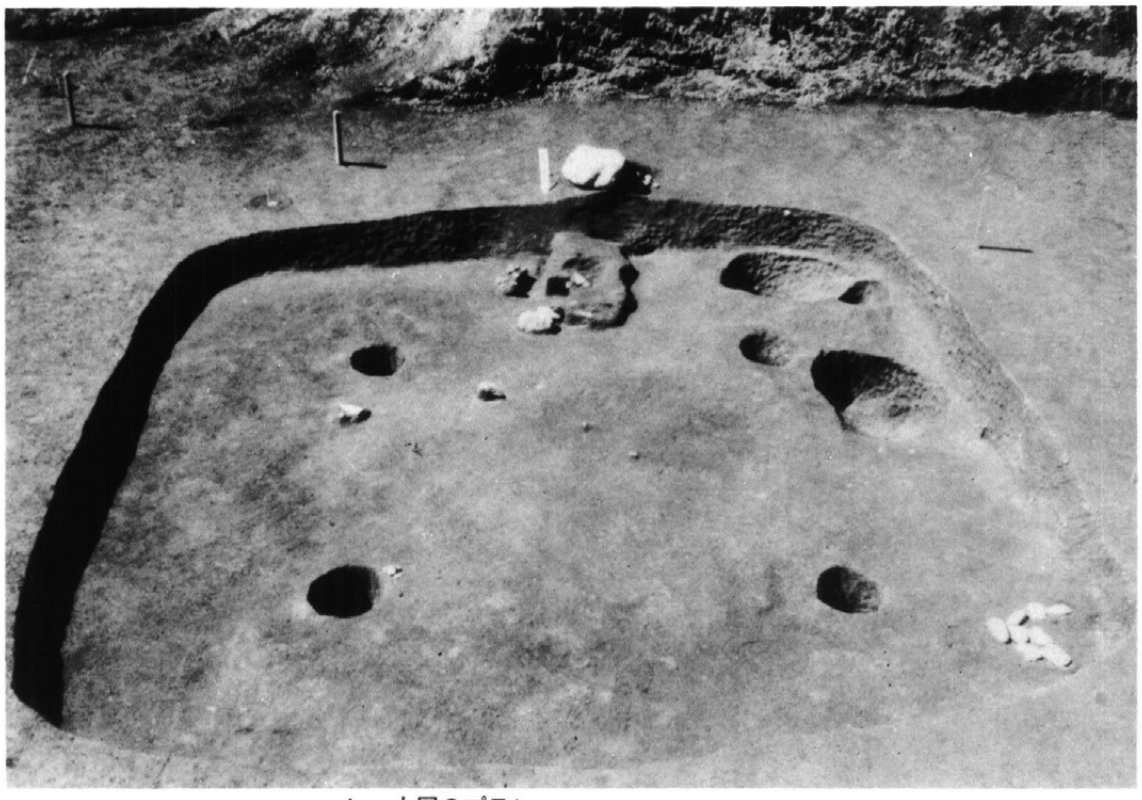
写図１　発掘調査前の栗屋元遺跡Ⅲ地籍



1.　南側北垣外から

2.　東側から

写図２　１号住居跡

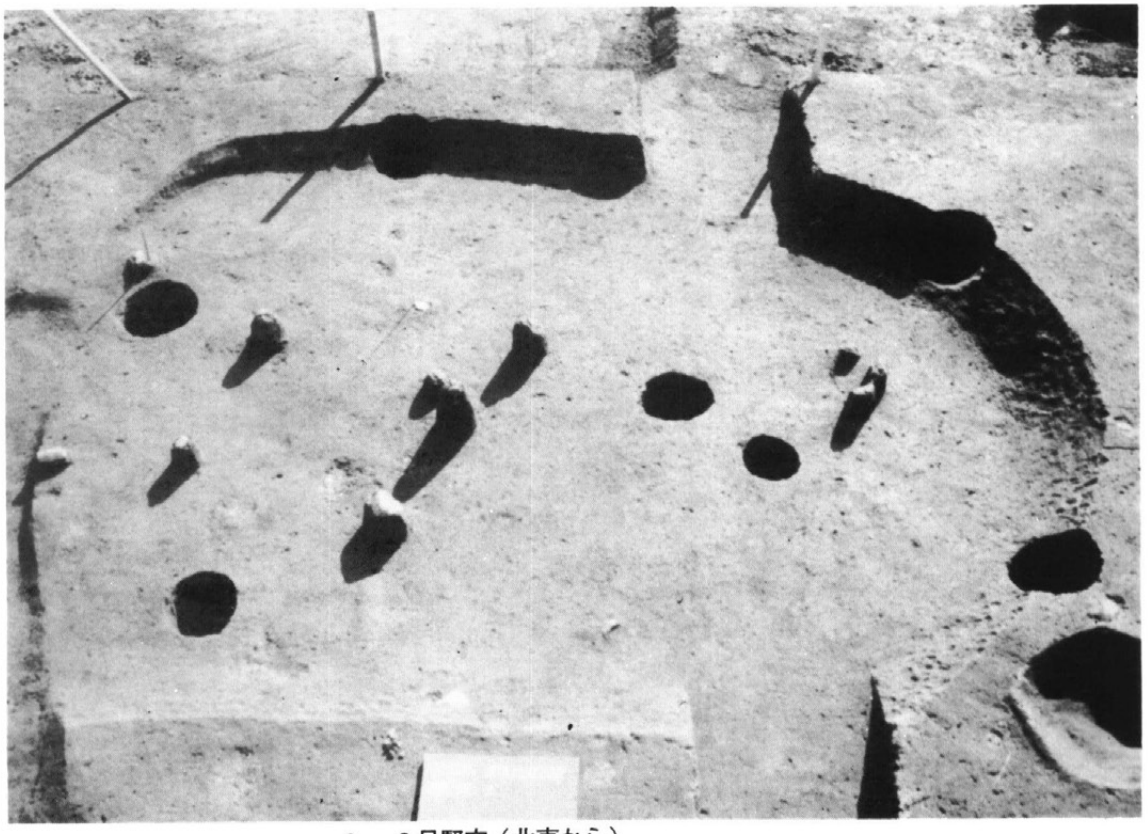


1.　上層のプラン

2.　覆土中の土器出土状況

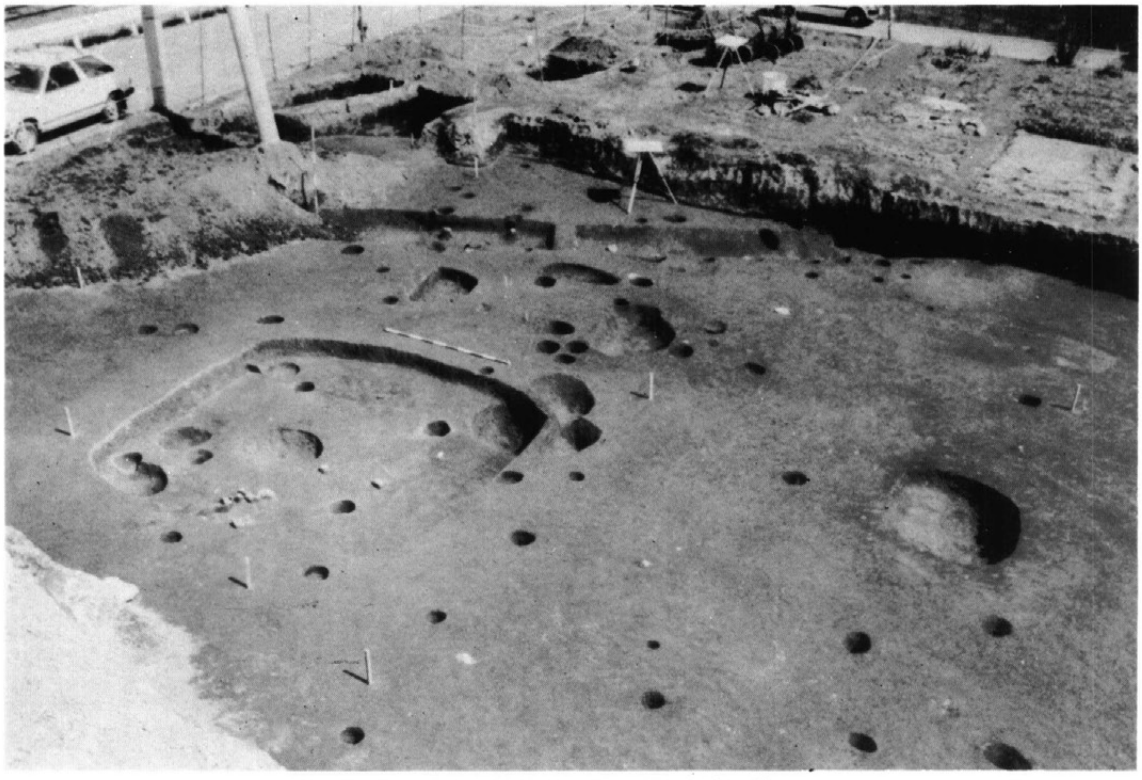
写図3　1・2号竪穴

1.　1号竪穴

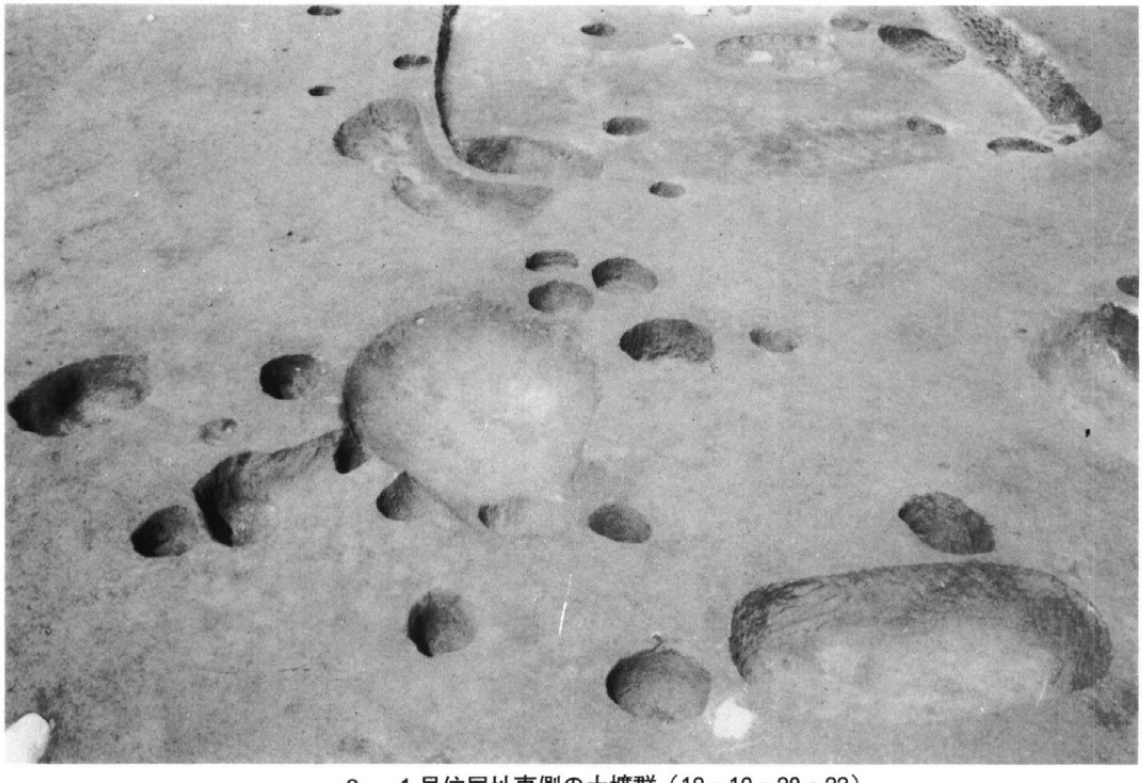


2.　2号竪穴（北東から）

写図４　１号住居跡と周辺のピット・土壙・溝１



1.　１号住居址東南のピット・土壙・溝２



2.　１号住居址東側の土壙群（18・19・20・22）

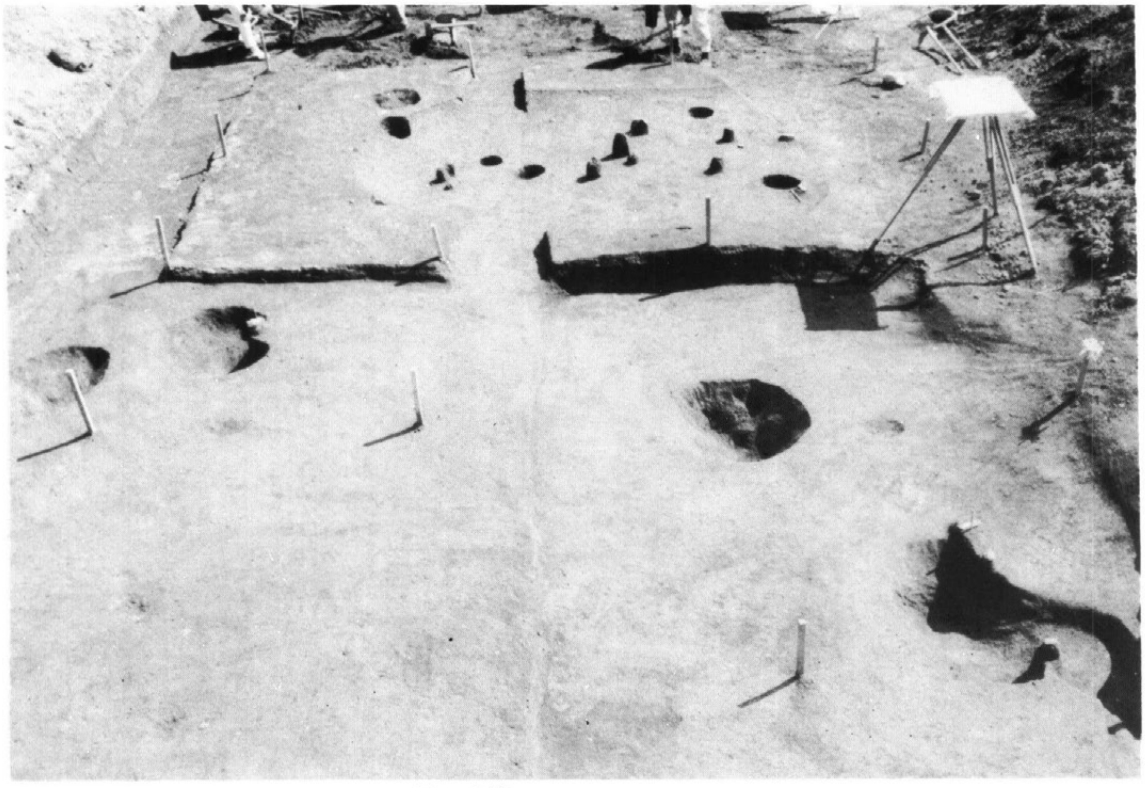
写図5　溝状遺構2・3

1. 溝　3

2. 溝　2

3. 溝3土層

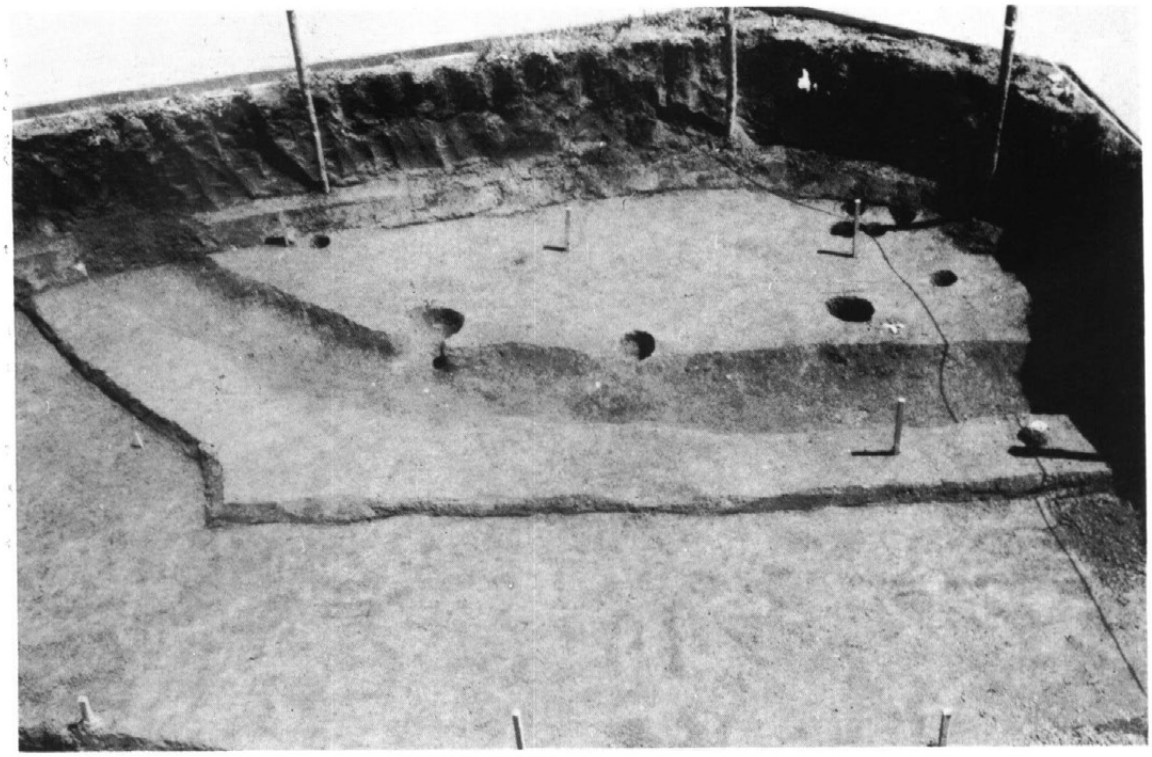
写図 6　西側の土壙と柱穴群Ⅱ



1.　西側の土壙

2.　柱穴群Ⅱ

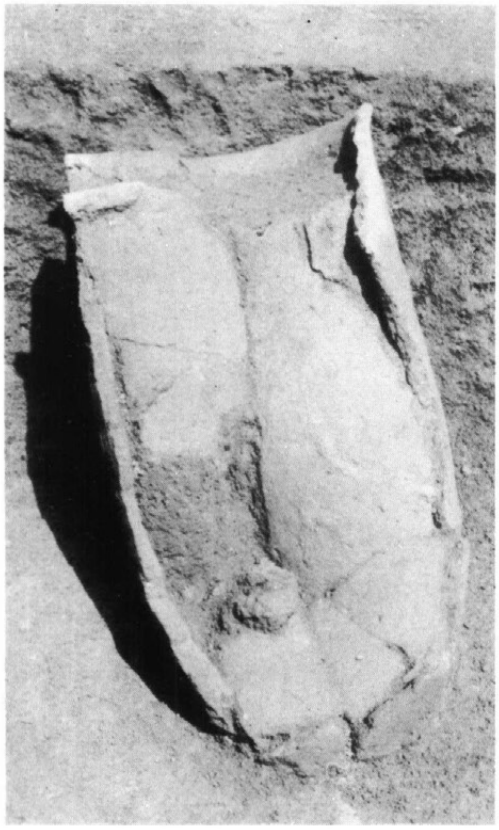
写図７　東側上・下層の遺構



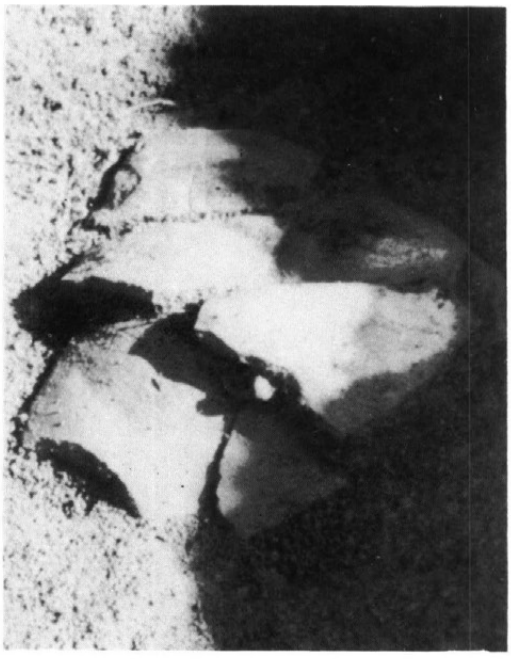
1.　柱穴群１と溝５

2.　下層の土壙群

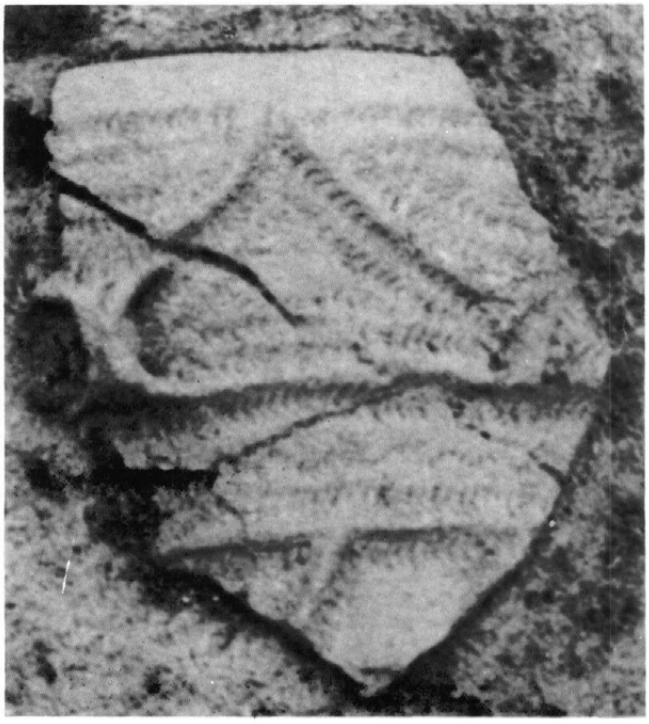
写図８　土器の出土状況と古銭



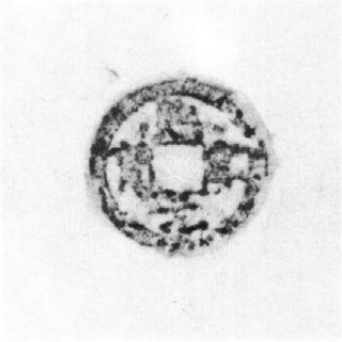
1.　１住のかめ



2.　溝１の晩期鉢

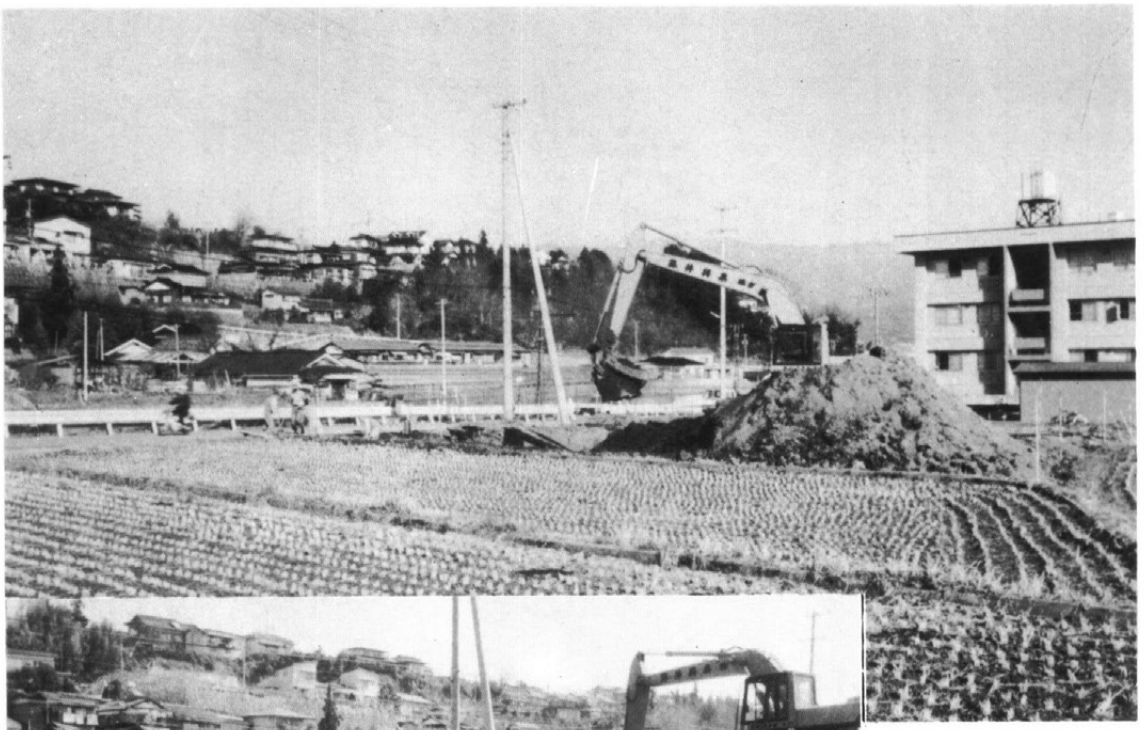


3.　東側の土壙の土器



4.　Ⅰ竪穴２出土

写図９　発掘調査風景



1．・２．
重機による排土
と遺構探し

3．　東側の土削り

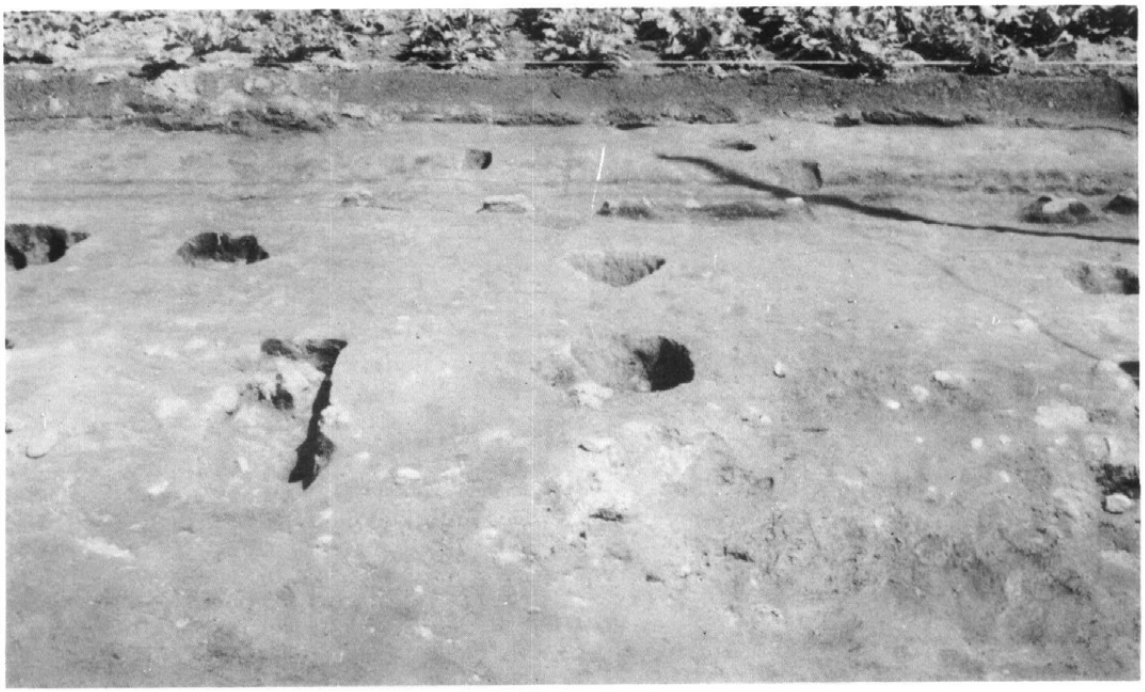
写図10　栗屋元Ⅰ地籍の旧道と建物跡

1.　栗屋元遺跡の台地

2.　旧道と石垣

3.　建物址（南から）

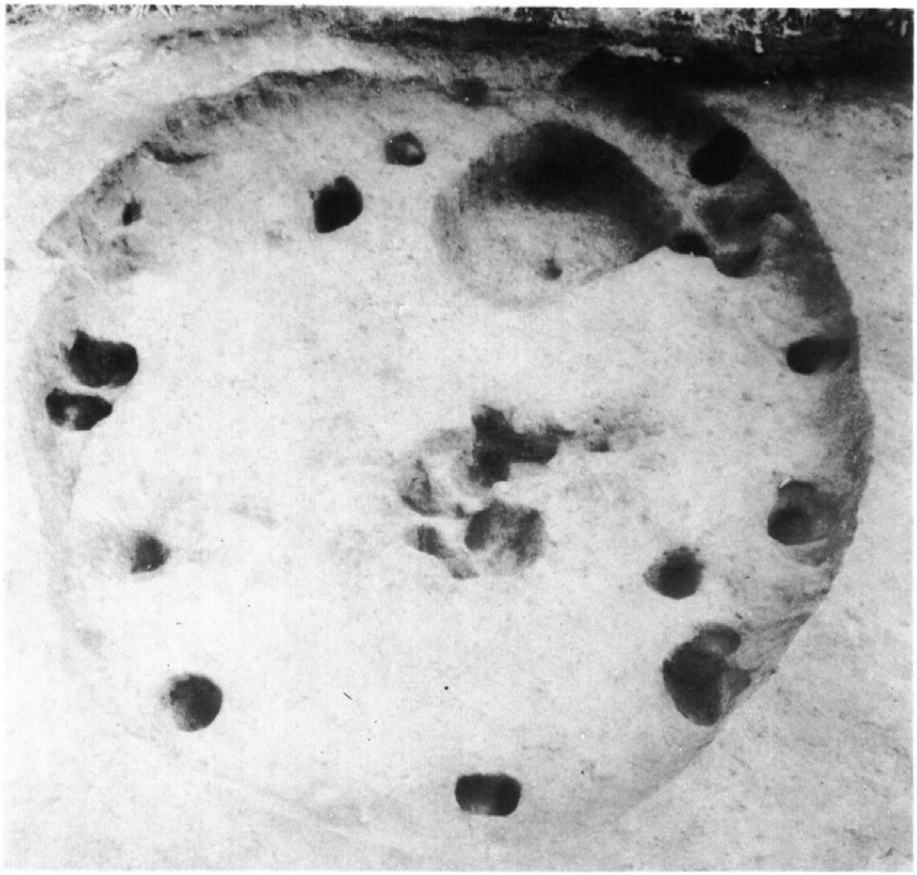
写図11　近世建物跡



1.　建物跡中央のピット

2.　溝１と建物跡（南から　　西から）

写図12　2号住居跡と土壙1・2

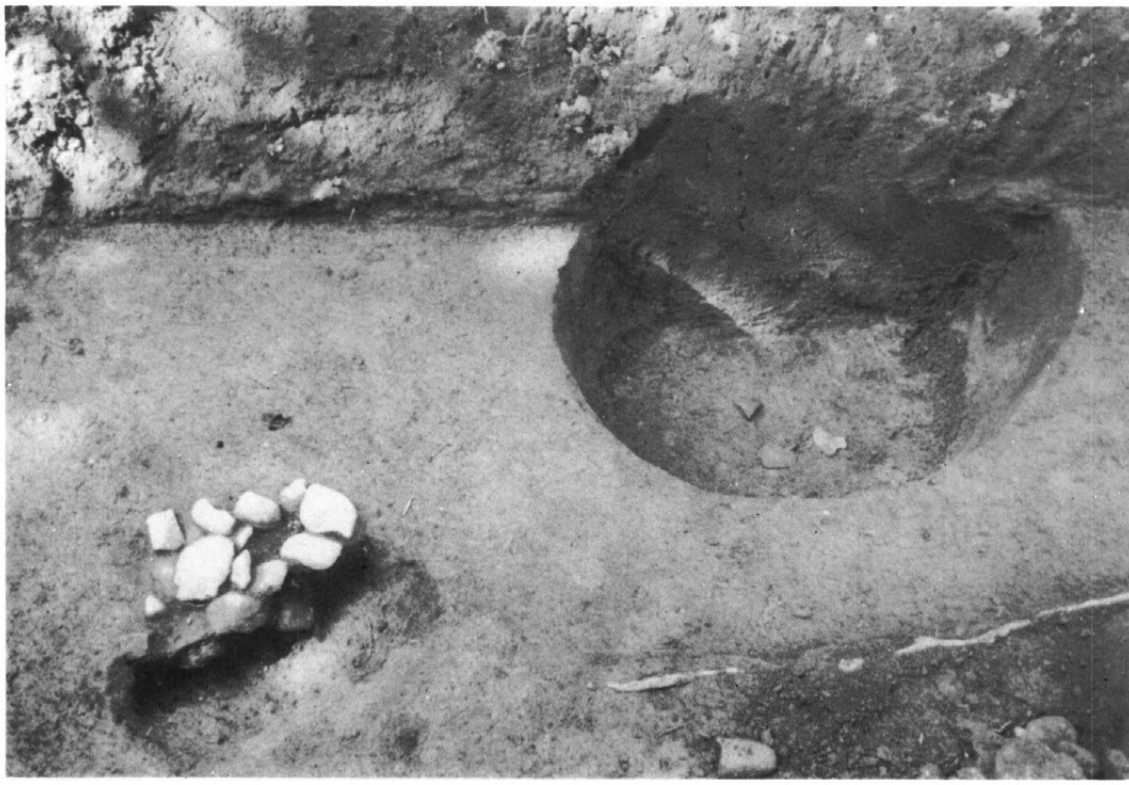


左

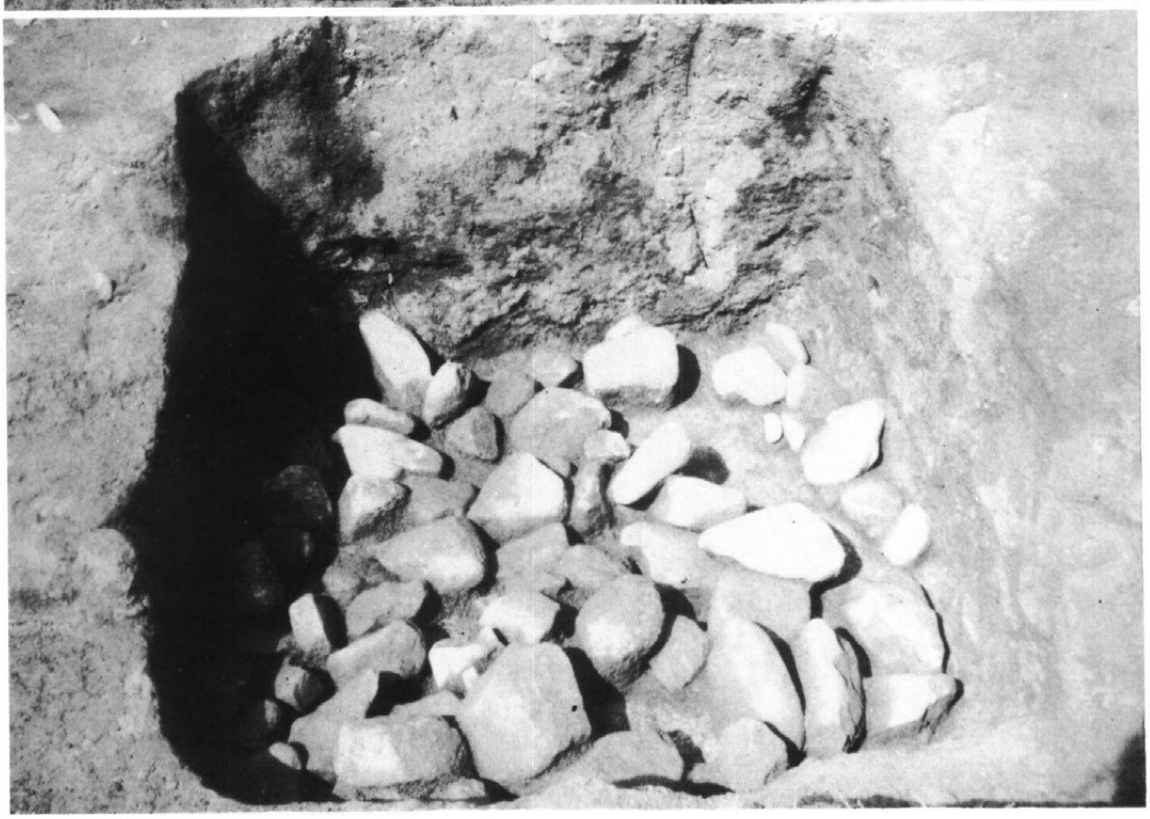
1. 2号住居跡

下

2. 1号・2号土壙



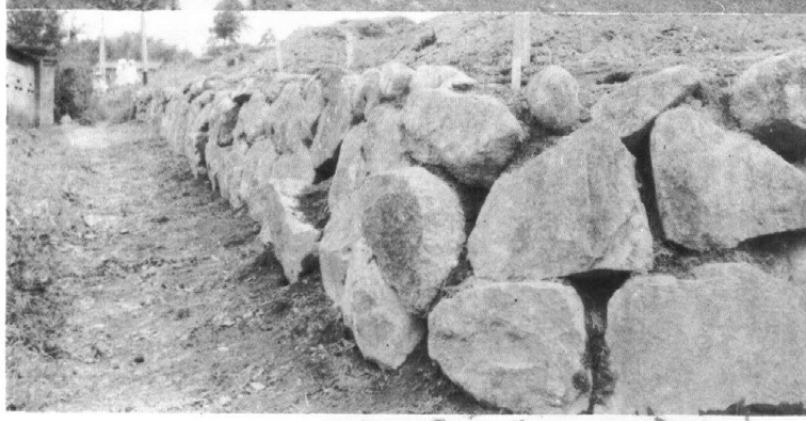
写図13　2号穴蔵状土壙



上 1. 上 層　　下 2. 底の石

写図14　北垣外・栗屋元Ⅰ地籍の溝と石垣

1.　北垣外の溝と石積



2.　栗屋元Ⅰ地籍の旧道と石垣（西方へ）

（東方へ）

写図15　栗屋元遺跡調査団

栗屋元遺跡

昭和61年10月

発行　郵政省信越郵政局
長野県下伊那郡上郷町教育委員会

印刷　新葉社
飯田市常盤町飯田商工会館内